

皆は方いし美で品上

# 粉白ブラク

鉛無良純



礬石イテカ

の良最石  
の驗

十月本格興行  
文楽座人形浄瑠璃



日高  
文楽座





十月本格興行  
二日目の豫定時間表

前 競伊勢物語

玉水淵の段(午後三時開幕の豫定)  
春日村の段(午後三時五十分開幕の豫定)  
御食事時間 幕間約二十分間の豫定

中 桂川連理標

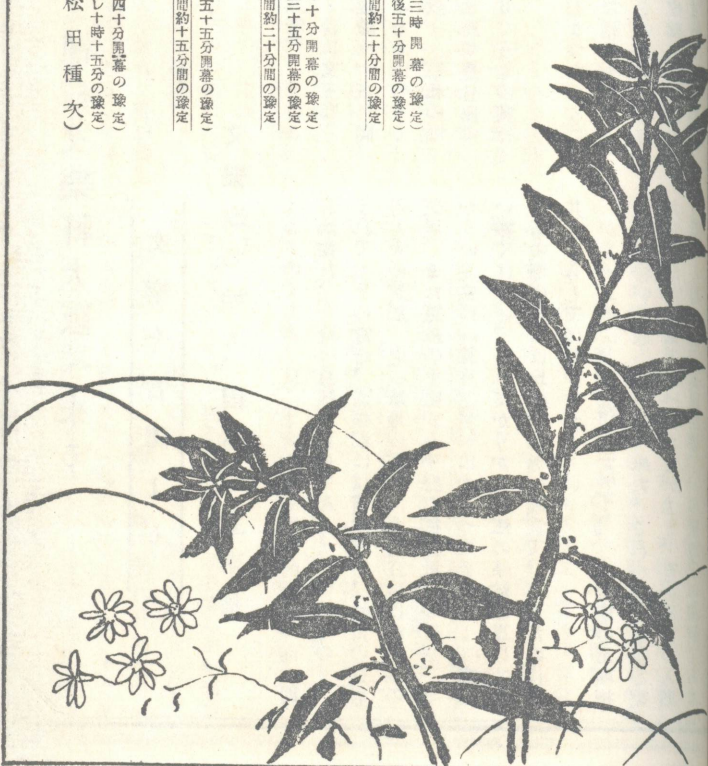
六角堂の段(六時十分開幕の豫定)  
帯屋の段(六時三十分開幕の豫定)  
御食事時間 幕間約二十分間の豫定

次 玉藻前旭袂

右大臣道有僧の段(七時五十五分開幕の豫定)  
御休憩時間 幕間約十五分間の豫定

切 關取千兩幟

猪名川内の段(九時四十分開幕の豫定)  
(打出し十時十五分の豫定)  
(舞臺裝置 松田種次)





# 植村文樂軒大阪へ来る

文樂今昔譚より

## 文樂座の始り、因講創立事情

義大夫……二代目義大夫……近松門左衛門……によつて義大夫節が確立した。竹田出雲……吉田文三郎……によつて人形舞臺が大成した。この連続八十三年間の功績なる『操り芝居』も、すぐそのあきにつよく傑作が出なかつた爲めに、天明……寛政……享和の頃になるまで、もう殊んど四分五裂で、竹本座や豊竹座の殘黨その他の末流が、隨時隨所て其の日ぐらしの興行を續けてゐるさういふ状態である。

かう云ふとまるで操り芝居が亡びてしまつたやうに聞かせるが、それは藝術の上から云つた話で先人以上に新機軸を出して、新道を盛り上げるさういふやうな經過が見られないだけのことで、先人が成就してくれた『操り芝居』をそのまゝ守つてゐる状態を指して云つ

てゐるのである。なんとも云つても郷土的香氣の高い固有藝術だ、一時の衰頹は見せてゐるさういふものゝ、それでもその當時、道頓堀には西の芝居、竹田の芝居若大夫の芝居。北の新地の芝居、北堀江には市の側の芝居、また寛政の中頃から平野町御靈社内の芝居。さういふ風に『操り芝居』にかゝつてゐて決して渺ない數ではない。そればかりか豊竹派の系統を享けてゐる市の側の芝居は比較的基础が確實で、こゝだけは、其日ぐらしではなかつたらしい。

かういふ際に、淡路の假屋から、文樂座の元祖植村文樂軒が大阪へ現はれて來た。これが最初根據を据えた芝居は何處であつたかさういふと、南區高津の入堀に架する高津橋（高津四番丁）の南詰西の濱側である。さて、朝春堂と號して後には支那貿易などもやつて大損失を被つたさういふことである。明治二十一年に第三世大助は死し、二十三年に二世文樂翁も逝き、そのあこは第四世文樂座々主は大助の實子泰藏が相續をしたが、遂に四十二年三月、松竹合名會社（當時は會社、後に合名社と改む）が買收して引續き現今その經營を續けてゐる。

さて話は元に戻る。第一世文樂軒が淡路から大阪の高津橋に出來た頃から天保十三年の大改革令の出來た騒動までは、群小興行家の簇立した平凡時代であつたが、此間に淨瑠璃界にまつて、二つ記憶すべき出來ごことがある。その一つは寛政九年の、淨瑠璃三業因講座の組織と。もう一つは天保八年の説教讀語の事件とである。

因講さういふのは大阪義大夫節同業者の殆んど全部を網羅した一の結社である。（現今も無論存續してゐる）この因講社なるものが明瞭に記録に現れ出したのが今を去る百三十餘年の昔（寛政九年三月）のことである。かういふ形式の結社はそもくこれが始めかさういふと、もう一つ昔にもそれに似た例がある。（私が襲

頃は明和と天明とも云ふが確かではない。本姓は松木氏、文樂軒は素人淨瑠璃での雅號である。だから最初の間は文樂軒の芝居と稱へてゐる。文樂座と稱へ出したのはズツと後明治四年九月からのことである。（だが便宜上文樂座と云つて置くことにする）。そこで此高津橋で興行した元祖文樂軒の芝居は、さういふ状態で經營を續けられたか、またいつ頃まで打つてゐたのか残念ながらそれ等は何等の記録も無いので解らないが、文化九年一月からは博勞町稻荷社内の芝居に移つて連續興行をしてゐる。それがやがて天保十三年五月の社寺内芝居の禁止さういふ改革令が出るまで動いてはゐない。此期間に元祖文樂軒は死し、同じ淡路の人で大藏さういふのが養子となり、二世と成りて、號を樂翁と呼んだところから後に文樂翁と稱された。これが久しく沈滞してゐた『操り芝居』を奮ひ立たしめた功勞者で、即ち新道中興の恩人。單に人形淨瑠璃經營の才ばかりでなく、文才にも富んでゐたのだから、無論藝術的にも理解を有つてゐた。新作物を多く上演し自身でも改作などをしてゐる（新作の事は後に説く）。第三世は文樂翁の實子大助さういふ人で、これは骨董物が好

藏する竹本筑後掾の連盟状)を見るに實永の頃に筑後掾が『二十日會』といふのを開いて門人を集め、師弟の情誼を温めると共に、専ら藝道についての口傳教訓を施したといふ事實がある。それは毎年正月……五月……九月の二十日に三回名の如く『二十日會』を催して來たが筑後掾歿後、門人中にも自然各地に離散したり、いろいろの事故があつて、會合することが出来なくなつた、で二十日會も有名無實に終らうとしてゐるこれを歎いて享保六年五月、竹田出雲が八方へ檄を飛ばして、勧誘してゐる。その回文の一節を記して見る

筑後存生より定め置かれ候、正五九月二十日會の儀、同門弟衆の内、近年心々にて成就致し難く候左様にては此會退轉に及び道喜(筑後の事)存立の本意も立ち難く且つ一流の末にも成り候事殘念至極の儀に候……。

かういふ按配で熱心に勸説してゐるが、サテその結果どうなつてゐるか知るよしもないが、爾來何等かの方法で、かうした會合結社は續けられてゐたものと思はれてゐる。

これと因講とは形式も精神もだいぶ違ふが、自派を

向上せしめ保護せしめやうといふ點に於ては同じである。以下寛政九年創立の因講結社に就て當時の事情を少々述べる。

此當時の淨瑠璃界には素人の所謂天狗連が多く、中にまた相當の技倆を持つてゐるものもあつて、これが無暗と大夫を勝手につけて諸方へ出演した。當業者から見ると永い間師匠について苦勞してやつと許された大夫名をさう亂暴に使用されては堪らぬわけ、で見つけ次第に其不埒を責め、撤回を申込んで見ても、なかなか應じない。と云つて打つちやつて於ては本業の大夫の渡世の妨げになる、いろいろ手を代へ品を代へてかういふ偽物の撲滅に全力を注いだが、どうしても、横着者の跡を絶たないのだ。で當時の年行司をしてゐた豊竹時大夫(三代目)竹本重大夫(二代目)後に四代目染大夫、を始め竹本町大夫、文字大夫等が連署して、その筋の御厄介になることになつて、町奉行所へと出訴に及んだ。すると當役の山口丹波守は早速これを受理して、萩野勘左衛門、工藤七郎右衛門、といふ役人達と協議をして、直ちに命を下して、不埒なる素人大夫ごもの一掃を試みた。

これで先づ大夫連の目的は達し、安心は出來たといふものだが、さて歸つて己れを考へて見るに、このやうに素人の横着物が天下に横行をするといふのも、所詮は當業者にそれ／＼節制が缺けてゐる結果で、すべての風儀も次第に頹廢に傾いてゐる今日、或はかういふ出來ごこの起るのも當然かも知れない。此際當業者は大いに結束して、協同的の歩調を取り、外敵に當ると同時に、内には大いに親交を温めて、斯道の興隆を謀らねばならない。これはよろしく當業者一致の機關を設けて、同盟結合の實を擧げるにしくはない。かういふ處へ氣がついてサテ此處に因講なるものが出來たわけである。そこで此組合は直ちに大阪在住の太夫

三味線衆に依つて組織され、その重なる人々が協議の上、左のやうな申合せ規約が出來た。

一、淨瑠璃並に三味線心懸けの人々因講へ入講に及ばず、假令稽古淨瑠璃も講外の太夫三味線一座致すまじく候。入れ込み相抱へられ候は、最寄の年行司より篤々相糺し候上に應對濟引致さす可く候。以上

かういふ規約が出來て、毎年十二月二十五日には、天照皇太神宮を奉祀して、御神酒を備へ、天下泰平五穀成就、併せて同業の者は親子兄弟の如く睦しく因みを結ぶといふ趣意で擧つて此日に集合した。當時の極め文に、

天照皇太神宮へ例年極月御神酒奉備候間當日は入講の衆中遲滞等無之様右御神酒頂戴の爲め第一に御出席之れある可く候

とある。かうして組織的な同業者の機關は出來た。さうして一年中の問題を此處で擬議決定することになつてゐる。席順は年功者をもつて上席とする。資格からいふと、古老……中老……平人、といふことになつてゐる。その席は新町橋の西詰にあつた料亭新柳樓といふのがその會合の場所であつた。以上が因講の起源である。(現今の因講は略する)



前競伊勢物語

玉水淵の段  
春日村の段

玉水淵の段

娘 信 夫

磯の上 豆四郎

亭主 五 作

鉦の鏡 八

代官 川島典膳

文字摺賣おさき

文字摺賣おたに

豊竹和泉太夫  
豊竹島太夫

竹本長尾太夫  
竹本貴鳳太夫

竹本町太夫  
竹本鏡太夫

豊竹綾太夫  
竹本源路太夫

竹本浪花太夫  
竹本文太夫

竹澤團六  
野澤歌助

この淨瑠璃は大近松の『井筒業平河内通』に負ふ所多く奈河龜助が安永四年四月の嵐座の大歌舞伎に書下したのに初まり同時に院本に仕立て、八月に都萬太夫座に於て島太夫、春大夫等によつて初演に等しい興行をされてゐます。これより先きに四月に撰に上場されてゐますが太夫其他未詳になつてゐます。全五段に綴られてゐますがその内容が時代を王朝に藉り惟仁親王と惟喬親王とが跡目相續の御争ひに絡り、それになつてはならぬ御鏡を惟喬親王方の加擔人を強要してゐますのでその難題のためには有常は因果を含めて信夫と豆四郎に二人の身替りに立せます。御鏡を得た業平と井筒姫は首尾よく惟仁親王を長き邊りの御跡目に立たせま

す。この『伊勢物語』はさきに大正五年六月興行の文樂座に上演されて實に十五年振りの上場で古靱太夫が初役で春日村の段を勤めます。當時は越路太夫が春日村を語り古靱は、はつたい茶の段を語つてゐました。研究的氣魄に充ちてゐる古靱太夫がこの初役に如何に春日村を聴かせますか興味横溢のもので御座ゐます。

が盗んで何れへか隠してしまつた。奈良街道の玉水の淵が怪しく鳴動する。殺生禁斷の淵にて鳥類の羽ばたきむ利かなくなる。必定御鏡の在所に違ひない。代官の警固は頗る嚴重で近く都から探れに來るこいふことを聞いたのが春日野に住む小由の娘信夫と聲の磯の上豆四郎であつた。三人は惟仁親王方で信夫は單身竊に御鏡を手に入れた。當時殿上人として名うての紀有常も乗物行列美々しく小由の方を訪れた。信夫は實は有常の落胤で有常の息女として御養育申上た井筒姫は長き邊りの御胤であつたのです。在原の業平は井筒姫と相許した仲で信夫の夫豆四郎はまた業平そのまゝの面貌であつたのです。惟喬親王は井筒姫を後に入れること

人形

文字摺賣おさき 吉田文之助

磯の上 豆四郎 桐竹紋太郎

娘 信 夫 桐竹紋十郎

鉦の鏡 八 吉田玉松

代官 川島典膳 桐竹門造

同 家 來 大 ぜ い

亭主 五 作 吉田玉徳

春日村の段

中 竹本相生太夫

次 (鶴澤猿 糸叶)

切 竹本大隅太夫

鶴澤道八

豊竹古靱太夫

鶴澤清六

七里通ふて帯迄解いてナ枕取間に夜も明て濟ぬ心のしんきさア調ふ小歌も力草聲はり籠や文字すりの絹を商

玉水淵の段 (口)

ふ京通ひ坂道かけていつきせき捕はぬ足の女子連後やお咲が世話焼顔コレお谷早ふおじやいのふイヤ又此信夫様んは何を仕て居やんすぞ、チいあそこへ戻らんした早ふくに漸さ追付信夫も息を繼チいしんど、もそつと静にあるいて下させんせいなエい何じやぞいの何をいひじや、らあの豆四郎さいふナ御簞さんを連れしやんしたゆへわしらを先へ出し抜いて指合なしの二人連道行する氣でござんせふびなチいモ何を言しやんすやら豆四郎様んが後にやら先にやら知らぬけれど待合さす内へ逝るさこちの豆四郎さんが呵つてじやはいなアノ呵られるがわしやこはいオーヨウ〜〜〜こちの豆四郎さん呵られるさこはいヨこ在所育の

人形

紀の有常	吉田榮三
母小よし	吉田文五郎
磯の上 豆四郎	桐竹政龜
娘 信夫	桐竹紋十郎
鉦の鏡八	吉田玉松
在原業平卿	吉田光之助
井筒 姫	吉田文作
代官川島典膳	桐竹門造
同 家 來	大 ぜ い
有常の家來	桐竹紋太郎
在所の女	吉田覺三郎
在所の女	吉田傳之助

悲しき中に取巻き惣々がそやし立て  
ぞほのめく中日脚も西にかた休め小  
揚履ふて豆四郎チーイ〜アレ〜  
向ふへ豆四郎さん、爰ぢや〜こ小  
手招き呼ばれてこつかは走り付ヤレ  
〜皆は早い足に言に信夫は傍によ  
り何んのわしらが早いのにやないお  
前は後に何をして居やんしたへチー  
そりやこそお格が始まつたお谷こち  
ら向きやとお喉が粹顔豆四郎イヤモ  
あんまり肩が痛む故荷を持って貰ふこ  
此人を雇ふて居る間にムンわしやそ  
んな事は知す後の茶店に美しい女中  
さんもしそこで休んでかこモ大体案  
じた事ではないいなマ〜よい加減  
な事を言やいの、しかしおれもちよ  
つと見る所が近付の女中に恰好似た  
故前へ廻はつて見ただけ損したがコ

レ雇はれの人もいかい大儀かはり  
極めの外にソレ酒手やコリヤ忝いイ  
ヤナニコレ皆ぞ爰で支度して用心の  
よい此海道夜道をかけて逝ふぢやな  
いかチー夫に時分も帳場籠の内サア  
ござんせと打連れて内へ這入ば荷持  
の男おらも貰ふた此酒手ぐつこ一盃  
引かけふさ〜もに茶屋にぞ入にける  
所の代官川嶋典膳家來引連門口より  
亭主〜と呼出しコリヤ其方も知る  
通り當所玉水の淵四面は殺生禁斷  
の所故數多の諸鳥集りしに此頃は  
かなる事にや其鳥一羽も飛去す又淵  
の水鳴渡る故今朝都へ御注進申せし  
に正しく是は三種の神寶淵に近づみ  
あらんこの御評定此所より近ければ  
番人數多申合せ萬一禁斷の場所へふ  
ん込者有らば大鼓拍子木合圖を持つ

て頼め取らん此目村次ぎに申合せ置  
急度申渡したぞ時の權柄ハアはつ  
と亭手は内へ代官は元來し道へ引か  
へす。様子立聞豆四郎扱はま心はや  
れども邊りの人目とや角ご思案ちま  
たに迷へ共何の氣もなく打連れてコ  
レ信夫マ、大事の事忘れて来たは  
の辨野少將様お詔への絹地をお玄關  
に置いて来た引返して京へ上る程にコ  
レ皆は先へ逝でたもチーそんなら信  
夫さんも一所にイヤ〜わたしや豆  
四郎さんか京へゐてなら又京へ行は  
へエ〜さつてもきつい引つき輪そん  
ならわしらは先へ行コレ怪我せぬ様  
に随分早ふ戻りやさんせアイ〜は  
いさんによい様にチーそりや氣遣ひ  
さしやんなご友達中は親切に挨拶さ  
り〜別れてゆく。

(床本) 玉水淵の歌 (奥)  
後ばさし合揃ける信夫は心いそ〜  
こ是から又京へ行のはしんどいけれ  
ど誰れ憚らぬ夜の道二人一所に手を  
引てチーうれし常に通ふ此道も友達  
衆におだてられ笑はれるのを樂しみ  
と思ふて見ても差合に後へ下れば先  
へ行娘御さんが氣にかかりほんに寢  
た間も此胸が休まる隙はないいな  
今宵は心晴々二人連立若女夫サア  
ござんせと寄添ばアイヤコレ信夫京  
へ登るご言たは嘘友達衆をまかふ斗  
じやム〜そんなら二人そろ〜と咄  
し仕もつて逝のか〜こいへ豆四郎  
両手を組思案途方にくれるがチー  
そふぢや〜こかけ出だす信夫は  
引留コレ申最前からのそぶりこいひ  
コリヤアマア〜(オ〜合點の行ぬは

尤が今こなたも聞通り淵の中鳴動  
するは正しく神寶ましまさんこの都  
の評定サアそれぢやによつてエ〜そ  
んならお前は玉水の淵へア〜コレシ  
イ聲が高い都より手を入れて捜し求  
めるご覺へたり惟喬方へ取れば悔  
んでも返らず片時も早く忍び込み實  
を取て奉るが此身の忠義お家の爲  
女房さらばごかけ行を袖に纏つてマ  
ア〜待つて下さんせいなコレ玉水は  
禁制の場所ぞ〜(お前が)行しやんす  
ご科人にサ成ますぞ〜(オ〜警へ)科人  
に成ふが殺されふが忠義にはかへら  
れぬサ〜ご放せイエ〜待つて〜こ  
もみ合ふ後へ茶屋の五作ぬつと出ヤ  
ア様子は聞いた二人ながら代官所へ  
連れて行くご引立かゝるを以前の雪  
助首筋纏んでぐつと〜しめぢやご斗



を此世の暇死骸を直に傍りへ蹴飛ばし  
ア、コレ、コレはいいことではない、こ  
さんの尻持はコレ此鉦の鏡八じやわ  
いのふム、そんならこなさん何角の  
様子ハテ知つて居る故しめ殺したは  
で訴人をさすまい爲、シタガコレ  
なさんの思ひ付悪いぞへ、禁斷の  
場所へ這入て首尾よふ行ばよけれ  
取物も取らず、簀巻に成たら何ささん  
す、よし其實を都から捜す言ふて  
も今夜や翌の事では有るまいサアそ  
れぢやによつてさつくりコレマよ  
ふ勘辨をして見やんせいのム、ム成  
程をんならこなたの言通り今夜は遊  
でマア明日の事コレ此場の時宜は  
沙汰なしにナ、おれが事も互に沙汰  
なし、夫は合點サア信夫おぢやサ  
ア早ふ逝んせおさらばと思ひは一つ

兎や角さ心もくもる雨もよふ足を早  
めて急ぎ行く見送る鏡八以前の死が  
い頭持上げ鏡八もふよいかチ、まん  
まご首尾よふやつ付たが代官の口ぶ  
れ何でも淵に寶物がサ夫で二人が言  
合してせしめうご相談中先越ふさし  
をつた故に此仕事コレ簀笠で顔隠し  
てチ、水練得て居る此鏡八チツトヨ  
シ、禁斷の場所へ案内はこの五作  
が知て居る人の見ぬ間に堤の原から  
チ、合點さ身繕ひ取出す簀笠菅間の  
更ぬ中に夕立ば馬の瀬越しや逸散  
にかけ出してこそ急ぎ行扱も神鏡隠  
れます寄符ぞ正に玉水の淵、物すこ  
く鳴動せり兩の芦原かき分押分欲の  
くまたか眼をひらかせ鏡ふ大膽禁斷  
の淵ばごう、ごう、音を知  
るべに鏡八水練得たる身も軽く飛

込水に音増ていご物凄きこなたの道  
むざん成から夫故に信夫は爰にかち  
はだし落る涙の玉水や、漸走りつく  
く、思ひくづおれ立ごまり傍り見  
廻し、道まで連立ばぐれたふり  
で此様な恐しいこわいめするも夫の  
爲そふさは知らず今頃は嘸や尋れて  
居やしんせふ豆四郎さんわしや爰  
に居るわいなもし咎められ殺された  
ら是、此世の誠のお別れ今一度お顔  
が見て死たい戀路の間に女氣の聲  
も得上ず忍泣むせび伏てぞ見へける  
が思ひ直して、泣目を拂ひア、歎く  
まい、何事も夫の爲成ぬ迄も其實  
を首尾よふ持つて逝んだなら嘸悦ば  
しやんすで有ふと思へげ夫れ斗りが  
一つの樂しみ譬此儘死る共實をさら  
いで置ふかか夫を思ふ一念力かよは

き女も戀故にふるふ膝踏踏しめ、  
漸立寄汀の傍怪しの水音心得ずと  
かたへの芦原かき分、暫し窺ふ我  
家をさして。

(床本) 春日村の段 中(袖うり)

むかし男うゐらうむかし奈良の京春  
日の里さい、けんも今は都も放れ庵  
主の老母は陸奥に住馴たりし年月も  
移りかはりて此里に世渡る業も忍ぶ  
擯年ば六十か七年に當る夫の供養ぞ  
ご秋の初米挽臼の廻る祥月命日は昔  
男ぞ戀しけれこいさいふたさて行る  
、道か道は四十五里波の上コレかみ  
さん機嫌よふ歌謡ふてかと思へば涙  
ぐんで何が悲しうござんす言ふに  
小よし手拭目に當さればいのふけ  
ふは死しやつた親仁殿の命日長の馴  
染をふり捨てて七年後に先立しやつた

此ばはもふくるか、と侍て居や  
しやるで有ふけれど此世の業がみて  
ればこい言たてて行る、道かご諷  
ふに付て悲しう成るごふぞ早お迎  
ひを侍て居ますの眞實は昔を今の涙  
也サツテモかみさんばきつい男思ひ  
わしらはささまさ喧嘩のしづめチ、  
しづめの次手にコレかみさんアノし  
のぶずりの思ひ付はアリヤごふした  
物でござんすヘサアあのしのお摺の  
始めは思ひ付て拵へた事ではない。  
しつての通りわしは元陸奥の者親仁  
殿が秘藏にさつしやつたアレアノ石  
篋じやと思ふて撫ては泣きさすつて  
は泣毎日、石に取付て泣くらす内  
きる物も石にすれて自然さ模様染  
つたはマふしきな事じやとて居た  
折ふし河原の左大臣融様さいふお公

家權が干賀の掛籠、御見物にお下り、  
ちの内にお宿申たれば其咄しをお聞  
なされ手向の歌をよんでやらふご陸  
奥のしのおもちずり誰故に亂れ染に  
し我ならなくに、此模様をしのぶ文  
字摺ご名付た歌の心今此よふに世渡  
りの種に成たあの石も親仁殿じやご  
思ひ出すア、又神さんの連合咄し夫  
れでは昔ばよい男で有たかヘイヤよ  
い男の次手に業平様ご言人わしのぶ  
摺の狩衣さやを着やしやつてから  
めつたやたらにしのぶ摺のばやるも  
仕合其おかげでこちらも相應に錢儲  
けヤそればそふ此信夫さんや豆四  
郎さんはおい事じやないかいなサ  
イノチアア戻る筈がいんまに戻つて  
こわはいご噂なれば、いきせきご  
我家へ歸る豆四郎様子は何と門の口

母者人今歸りましたチ、智殿待兼た  
くが信夫はごふしてご尋に恟りエ  
アノ信夫はまだ歸りませぬかコレ  
く智殿そんならこなた連立て戻り  
はせぬかハイ連立て歸ります道でそ  
るく先へ往てくれいご夫れからこ  
んさばぐれまして夜の明る迄尋ても  
見へぬは大方木津川の別れ道から間  
違ふて先へ戻つて居るで有ふさいき  
せきして、漸只今ヤアくくそん  
ならアノ狐にでもつまりやせぬか  
ア、心元ないコレく智殿皆の衆ご  
ふしませふもおろくく聲、チ、其案  
じは尤じやが斯して居ては埒が明ぬ  
わしらは一走り先へ往て尋てごふこ  
立騒げばアイヤナアノ梅田村の藤  
兵衛殿は智殿ご信夫が仲の仲人なれ  
ばひよつご密で居様も知ぬコレかみ

さん梅田村の藤兵衛殿はそんなら是  
の一家衆が梅田藤兵衛殿ご信夫さん  
ごは一家かへ左様ぢやんく仇口交り  
も如になき在所のか、衆は出て行、  
豆四郎は氣もそゆる申母者人アノあ  
ちら村の彦七は水練の名人でござり  
ますかへチ、智殿のかてくはへて  
いるくの事ごはつしやる池のぼた  
通るのさへごはが程の憶病若エ、  
スリヤ彦七、水練の名人と言たは嘘  
ム、ヤ申母者人もふお案じなされま  
すないやマアごふして、イエく  
お前に咄される様な事じやござりま  
せぬエ、マいまくくしいコレ母者人  
信夫は何でもこりや彦七さてつきり  
何ぞして居るのでござりますはいな  
エ、思や思ふ程いまくくしうてあほ  
ふくさいアコレ智殿いかに若いさい

ふてきつい腹の立様、もふくくそん  
な氣づかひの有娘ぢやない程にごふ  
ぞ機嫌直して下されコレ母が拜みま  
すヤアくチ夫れはそふごこなた飯も  
まだで有ふテエこしらへておませふ  
ご老の立居もかるくく緩籠の内へ  
入にける。折から表へのつさくく來  
か、るごらの鏡八が心の鬼を隠し角  
門口にせき拂ひチ、爰ぢやんくヤレ  
くく一遍尋たごすつご這入ばヤアこ  
なたは昨日玉水の茶店でチ、近付に  
成た鏡の鏡八じやごうそくくきよ  
くく上り口あたりを見廻し信夫女郎  
は戻つてからよつご逢たい逢せて下  
されホ、鏡八殿扱昨日はきつい世話  
で有た、そうして貴様は何ぞ用でも  
有てござつたかチ、ウ信夫にちつご  
賣たい物が有ゆへつがす坊で爰まで

來たのじやが信夫女郎はまだ戻らぬ  
かチ、信夫はまだ戻らぬがシテ賣た  
いごはごんな物じやチ、代品物は是  
でみすご懷より取出す片袖ム、夫れ  
はごふやら見覺の有様様ご僅の片袖  
を賣たいごはム、頼んでも有た物が  
イヤ頼まれては居れ共留守ならこな  
たに預けてお、安い物じや買て置ん  
せム、二三兩もする物かチ、事によ  
つたら二三百兩じやご爰のしんせう  
ではそふも成まい丁簡してまあ百兩  
なら賣てやるアハ、い、い、こりやこ  
りや鏡八隙づいやしな此代品物エ持  
て歸れご投出せばハテ我こそ高いご  
思へ信夫ご見たりや飛付てほしが  
代品物此片袖の賣口はたつた二ヶ所  
ひごりは信夫モウ一軒は代官所ハ、  
い、い、代官所へ持て往たら今でも百

兩や二百兩に成けれごそふすりや幾  
人共なふ人の損する事エ後生こそ願  
はずご殺生するごみめでもない爰な  
信夫に賣ふご思ふて持て來た人の命  
にか、つて有身上薬の此片袖サ望た  
ら金次第賣てやらふごゆすりかけ弱  
みへ付込疫病の神様かごご知れたり  
様子を知られば豆四郎鏡八わりや何  
處ぞで酒でも呑で來たか、いかふく  
だまくな、此袖ご何の身上薬あほう  
言はずご持ていれエイヤ何じや有ふ  
ご信夫に見せたらわかる事ツじや後  
に袖代取にこふ金拵へて待ていご  
言てくれ安い物じやかなご我一人呑  
込顔の鼻油そ、り上てご立歸る。後  
見送つて豆四郎あいつはごふでも酒  
に酔ていおるばも色々の事ぬかしを  
るエ儘ご帯はぬ事ドレ奥へいて一休

みやつてくれうも口の内、障子  
（床本） 春日村の段 次  
（はつたい茶）  
折から又も母小よし納戸を出て獨言  
片時遅いも待兼るは知つて居ながら  
此様になごに戻りの遅いぞやア、氣  
遣ひや待遠やご案じに老のしほく  
ご打眺めやる表の方大身ご見えて立  
派の乗物供廻りも花やかに門のこな  
たに昇すゆれば家來が心得懸懸に頼  
みませふくご案内す小よしは夫ご  
立上りごな様ご何方よりご尋る中  
ホ、夫れへ參つて物語らんご戸を開  
かせ立出る其勿体遺雲井に名も高き  
昔かんばし今ば又武家の作法も紀の  
有常勇備の骨柄ゆうくご供人引連  
内に入る小よしは、はつご手をつか



やらぬかやイエ／＼足を蹴かいて泥だらけ、お谷様の所で此着物借て着替へ中鐘取て之間に合ひ詞奥の間より母者人／＼信夫はまだ戻りませぬかよ立出る豆四郎チ、娘はさふから戻つてなれどそなたが寢入つて居た故にヘエ、おりやもふ戻りやせまいと思ひました。ハレマ舞殿のここでもないアノ遅ふなつた其わけはアノイヤそれも聞いておりました堤でこけたか轉てか／＼つたか髪もげらば何處その壁にごつかりさ帯の後ろ付てあるごづ／＼けりいへはアレかいさんあんな事いふてじやわいなサ、よいわいの若い中ばあんな事いふたり言はれたりの中が花ぢやヤナコレ舞殿わしが昔の馴染の人が奥へきてじや不機嫌では悪い程にコレ信夫

つて、チ、何んじやぞいなあたせはしない、京三がいから戻るやいなそれで草臥が休まる物かない風呂わいて有なら入ふかへチ、それも氣は付て有だけれど水は得汲す人手はなしよふたきませなんだこらへて下され悪かつたご詫る母より詫らるゝ娘はつらき押隠しエあたごんな腹の立つ／＼親が娘に訛言するあほらしい風呂へ入る事が邪魔ならいつそ勘當したむよいわいなサ勘當を／＼ごすつかりいへご心には訛の涙に袖絞るチ、何んじややらいかふ腹立て居るがム、何かコリヤまたアノ舞殿ご中直りがないのチ、ホ、ハ、ハ、ア、そふかくも猫撫撃エ、あたやかましい何んじやいな何處の國にか子の機嫌を損ふさいふ様なごんな親が有

下さんせご錦の袋取出し渡せば手に取さつくご見ヤアこれこそ八咫の御鏡ごふしてそなたの、さればいなお前に別れた其後でな、玉水の淵へ鏡八が忍び入るご聞た故先へ忍んで奪取危き所を逃れたも鏡の威徳ご聞て扱はご押戴キア、有難しく、忠義を憐む天の賜コレそなたの、御エ、忝いご悦びいさむ夫の顔見るも名残の彌増りご思ふて下さんすりや警死んでも本望ごいふにいばれぬ身の科を隠す心ごいぢらしく豆四郎はつご心付以前の片袖取出し此袖を鏡八が買へさいふたは訴人の謎エ、そんなら様子ごホ、知れて有るご其身は簀巻の科に替夫をそれ程大切に思ふてくれるか、女房ご手を合すればア、コレ申し何のお禮に及ぶ事シテ業

平様井筒様はへホ、今宵の中にお供して此所を立退所存そなたは母に勘當受やエ、チ、驚きは尤、玉水の淵へ洗し監義母人に迄かゝるは治定勘當受くれば則ち他人サコレ他人にかゝる法はないわいのあいそづかしに勘當受罪を一人に極めよごすいめながらもせきくる涙道理は聞へて有ながら此身一人を杖柱ご思ふてござるか、さんにごふまあ意味がつかされふスリヤ、母人を科人にする氣がサアそれはコレ可愛がられし恩にかへ憎まるゝものもやつぱり孝行の合點かいたかご吞込す夫も涙呑込で一間へこそは入にけり。母はそれ共納戸口信夫爰にかコレ／＼久し／＼ぶりで逢す人が有るサア、奥へごすいむる母信夫は胸にせぐり来る涙を無理に突や

物かないア、こちやごつごモヤはら立つて／＼／＼も半分は涙に譯も泣じやく孝行ゆへの不孝共しらで案じる親心茶釜の下もふすぼりし娘の心汲持てコレ、信夫よい呑かげんじや程にの虫鎖に一口呑やごさし出す茶碗エ、いやじやわいなご引取て振上げ上げながら心の内には神佛赦してたへご心願祈願くばんご茶碗の我が身もちいまる思ひ無理やりにいつし涙を絞らかす氣隨は如才ないからご母は猶しも機嫌取チ、いつにない腹の立て様コレわしが悪くばこらへてたもごい顔眺めて申しか、様スリヤ此様に不孝にしてもお前は私か憎ふもなし勘當する氣はないかいなアアレめつそふな事いやる何んのそなたが憎から不機嫌のわるいは



より取出す装束、申しそりやマア何  
 んでござんすへホー、今日より我胤官  
 位の衣服改めよ。下の袴や上の帯粧  
 ひかへし五ツ衣、ホーヲ遣は我胤能  
 似合た髪も次手に直してやらふそり  
 やマアお慮外でござんす。こいそく  
 立ちかたへなる櫛鏡臺取出せば立  
 寄又か胸の闇てらす鏡の面ざしも似  
 たる血すじにわけかめる亂れ心を取  
 直し玉のかづらのあでやかにエー我  
 子ながらもけたかき粧井筒姫に生  
 寫しアノお姫様によふ似たかへサア  
 其よふ似たが身の因果覺悟いたせま  
 抜き放す刀に恠り飛退てコリヤ何ん  
 てくくこいふ聲も涙も出すふる

い居るホー驚きは尤逆も通れぬそち  
 が命齊宮の御身がはりエーイそん  
 ら此家に井筒様のチー業平諸共忍び  
 賜ふ。春日の出口は敵の大勢連れが  
 たなき御命簀巻にあふて死なんより  
 コリヤ天子の御爲死んでくれ、十七  
 年の今日日に巡り逢たる此親も手  
 にかげ殺す心の内忠と義理とが世の  
 中にない物ならばござんす。座し前後  
 不覺に泣き居たる。信夫は兎角涙を  
 押へアーそふじやく、粧を破りし此  
 身の科さても死なねばならぬ命なる  
 程お役に立ちませふ。さりながらご  
 ふぞ今一度夫の顔チー道理くヤア  
 く磯の上民部が悴豆四郎用意よく

ば早是へハアはつご答へて豆四郎俊  
 清兼て覺悟の腹切刀出る姿も死装束  
 ヤアお前の其お姿にチー業平卿の御  
 身代り親磯の上後綱も勸氣を蒙る赦  
 免の願まきかの時は御身がはりご思  
 ひ定めた夫婦が命井筒様の御身に代  
 りコレ潔よふ死んでたもノウウ其お詞  
 に及ぶか誓お頼みないさてもお前  
 を先き立何んさまあ後にならへ居  
 られふぞ冥途の道も二人づれ迷ひ賜  
 ふな迷ふなご互に見合す顔も顔父は  
 中能智娘我手にかけて、殺るすこは  
 業ご業ごの寄合ひご忠義にかへし忍  
 び泣きこいめかれたる斗りなり。斯  
 こも知らず母小よし徳利片手にいそ

くごヤレく待遣にござりましょ  
 信夫はそこに居やるかご立寄る母親  
 有常が縁の中垣隔る衝立アーイヤ老  
 母縁切つたれば地下の其方齊宮に備  
 る信夫平人は官位の恐れ直きの對面  
 成むたしチーマアせちべんなアまは  
 思へ共恐れ多い身の上に成つたのは  
 わしも悦びおせめては聲を聞いてご  
 したふ母親泣く娘、申しか、様ヤア  
 くそこに居やるかいのふアイわた  
 しや今遠い都へ参ります。随分お健  
 でござつて下さりませエチーあの千  
 ことした事が目出度い都入りに何に泣  
 事おれもやんがて後から行それ迄聲  
 の聞きおさめナニアノチー斯せふわ

いの、そなたとおれが親ふて連れ彈  
 聲を合すも暇ややら饒別やらいかさ  
 ま親ご子の暇エイヤサ何成共それ一  
 曲早ふくく母親がたづさへ運ぶ玉  
 琴のいごし娘の出世の門出サア  
 信夫何なりご目出たい事をそなたの  
 いらべに付て行くぞやアイご返事は  
 しなむらも親ご夫の憂別れ何んごし  
 らべの糸つらき思ひもきゆる玉琴の  
 口舌は背の夢ご成二つ枕の妹脊川  
 レ信夫饒別の連弾に替つた歌を謡や  
 るのふイヤノウ老母今の歌は妹脊川  
 吉野の川のよしや世にたぐひ稀なる  
 身の響此世のわかれ洩出る月はさゆ  
 れご胸の鬮髪のおくれのばらふく

くご俱に亂る、親心驚驚の片羽の  
 さばくご子に迷い行小夜千鳥諸肌  
 ぬいだる夫の有様ハツト信夫は氣も  
 狂亂隔つる有常覺悟の豆四郎ぐつこ  
 突込む氷の及うしや妻のいせ紫の  
 色わるふやつれ顔見る悲しやごコレ  
 信夫何んごご仕やつたかまちつごじ  
 やうたふてたも年寄た此身は何時し  
 れぬ後から行ふご思ふ間にこれが一  
 世の別れじややら子に安かたのやす  
 からぬ親は空にて血の涙我身の上ご  
 思ひ切りひらめく及兩人が首はまへ  
 にぞ落にけり。音に恠り母親はあは  
 てかけ寄る衝立の蔭に空しき二人が  
 亡骸ヤアコリヤ何んで殺したのじや

春日野や其豆男つゝ井筒伊勢物語の因縁を爰に残して出て行く。

是か何處に立身出世元の様に仕て返してヤコリヤ〜娘やい舞殿のふ見れば覺悟の此有様死る事なら此母もなせに一つ所に殺さんぞ死出の山でも三途でもそなた衆二人に手を引かれ行くなら何の苦にならふ一人残りし此母は闇路に迷へさいふ事か生きるがよくばそち達もなせに死にやつたなぞ死だ生きて戻つていゝ譯を聞かせてたもと取りだし前後ふかくになき居たる。有常涙押拭ひ二人が最期も四海の爲と語るも聞も親と親業平井筒も轉び出知らぬ事さて二人が最期父上のお心むアイヤ我を父とは勿体なし先帝の御姫宮肚子内親王に

て渡らせ賜ふと恭々しくこれこそは先年紛失せし八咫の御鏡ふたゝび味方の手に入りしも此兩人が貞節忠義御身今より守護有べしと業平卿に手渡しし早お暇さ立上るいづくに忍び居たりけん鉦の鏡八踊り出で業平井筒を助けし様子都へ注進待つて居よさかけ出す所を有常も透さず小柄の手裏剣に其儘息は絶果たり。死骸は其儘禁斷の科を糺す政事の表し役人共へ手渡しせん我は夫婦が此首を都へ持參し二方の末の安堵を計るべしといだき上れば姫業平恩さなげきの手向草母は涙に夜の鶴父も涙の袖二つむかししのぶの摺衣信夫の里を



中 桂川連理柵

六角堂の段 帶屋の段

六角堂の段

竹本 鋈 太夫  
豊澤 新左衛門

人 形

女房 おきぬ 吉田 文五郎  
弟 儀兵衛 吉田 榮三  
丁稚 長吉 吉田 玉次郎

このお半長右衛門の事件は「曾根崎模様」宮園節の「朧の桂川」歌舞伎の「桂川仇白波」に仕組まれ好評を博したのを安永五年十月北堀江座に菅専助も書下し上演したもので上下二巻になつてをり、「道行戀の乗かけ」、「石部の宿」、「信濃屋」が上の巻にこんど上演さるゝ「六角堂」「帯屋」が下の巻になつてゐます。その内容にいたつては種々區々の巷説が傳へられて來てゐますも浮瑠璃の方では結局、「戀は思案の餘」を取つてゐます。帶屋の長右衛門は遠

州からの歸りがけ石部の宿で伊勢詣りから歸る信濃屋の娘お半、丁稚の長吉、乳母等と同居しました。その夜長吉も無態の戀慕からお半は長右衛門の部屋へ通ればしくもそこで十三のお半と四十五分列盛りの長右衛門との奇しき契りが結ばれます。長右衛門の女房お絹は人一倍の貞女で夫とお半との仲を知り乍ら家内に浪風の立つ瀬戸には何時も夫を庇ひます、義理ある家の中の浪風に心を痛めてゐる上にお半の腹帯、それにすりかへられた政宗の詮議、等所詮生きて甲斐なき命とお半を連れて桂川へ身を投げるさいふ筋になつてゐます。この「帯屋」は津太夫が十年振りに名曲の節調を聴かす浮世繪味豊かな優雅な絶品で御座ゐます。





に極つたらお半はおれの女房じやま  
 大きな顔して連れて出やア、いへへへ  
 申しお家様へ、連ては出られませぬ  
 わいなそりや又どふしてサイナ連て  
 出ても行所ござりませぬサアそこ  
 はわしお呑込で二人ゆるり暮すほ  
 ご金はわしがつけてやるエ、そん  
 ならアノ金を借ておくれなされませ  
 かへ是はマア、何から何まで大き  
 に御世話でござります何のゆかりも  
 ない人に海山御恩の其上に又色々の  
 御苦勞かけお金出して私が戀叶へて  
 賜はるお慈悲心思へば、エ、コレ  
 マ勿体ないチ、長吉殿何のいふこ  
 れはマア當分の小遣ひさ巾着より取  
 出す金小杉に包んで手に渡せばエ、  
 こりや何じやいなヨチ、コリヤ金じ  
 やチお金じや、ハ、ハ、ハ、ハ、エ時に

こエ、一朱二朱三朱四朱ハア、こり  
 や十二朱有はいハ、ハ、ハ、是をきつ  
 ざりばつむこはア、氣の幅びるな  
 絹様エ、有むたい、有むた山のほ  
 こ、ぎすこけつかのはいハ、ハ、ハ、  
 イヤマ夫に違ひのない事ならお前の  
 下知は背きませぬチ、よし、よし、  
 たら連立て逝ませぬしかしコレ長吉  
 の色事しめア、お絹様なんだす  
 いなおだて、おくんばなんハ、ハ、  
 ー、サ、行ませふ、おつこお供を  
 誓願寺三條通りを直すぐに柳の馬場  
 を上り行く。

帶屋の段

柳の馬場を押小路、軒を並らべし吳  
 服見世、現銀商ひかけ硯、虎石町の  
 西側に、主人は帶屋長右衛門、井筒

に帶の暖簾を、掛値如才も内儀のお  
 絹氣の取りぐるしい姪に、目をもち  
 はじこ襷かけ、洗濯物を引のしの、  
 皺は寄つても五調作り、母のおさせ  
 かけ出した長右衛門、もう晝過たに  
 戻らぬは、又川東で吞すゑ居るの  
 である、お絹ちつこ云はしやれぬか  
 いの。イエ、遠州の殿様から請  
 取りの脇差、研屋からくるそのま、  
 藏屋敷へ持つて参られました。サイ  
 ノ、脇差の研が出来ましたと持つて  
 行くばかりに、かう暇が要つて内の  
 見廻しが出来るものか、ア、同  
 じ事でも弟の義兵衛めは、モ痒い  
 所へ手のゆくやうに精出して居るに、  
 エ兄のぬるまに困つたさ、繼子を憎  
 み實の子を、持難したる眞眞口。聞

きかれて隠居氣配、瑞影狐ぐつて奥  
 より出で、詞ア、おば、聞辛い、死  
 なれた隣りの治兵衛殿が、五つになる  
 迄育られた長右衛門、無理に貰ふて  
 家の根づき、死んだ先の女房は隣へ  
 の義理があるさ、あら詞もつかは  
 なんだに、長右衛門成人以後後妻に  
 直つた身を持つて、連子の義兵衛は  
 かりを大事にかけ、兄が事云ふこ  
 がみく、エ、ちまたしなみやれ、  
 ヤコレ嫁女、氣にかけてたもんなご  
 女房にかはる佛性、詞オ、その結構  
 を見込で、財産をさくほうさにす  
 る長右衛門、随分可愛がらしやれ  
 ア、やかましやの、コレお絹様  
 居へ連れて居て、晝寝なごさしてた  
 もれさ、負けて居ぬ口逆らふば、後  
 生の邪魔繁齊は、裏の隠居へ嫁引

き連れ、行くと戻ると一時に、義兵  
 衛はさつかは内に入り、母者人間か  
 しやれ、一昨日兄貴が取り行かれ  
 た駿河の爲替、未金を見ぬ故、合點  
 がゆかぬと飛脚屋へいて問ふたれば  
 一昨日長右衛門殿に渡したさ、爲替  
 手形を出してみせた、すりや爲替の  
 百兩は、兄貴が宙で盗れたに極つた  
 かい左様であらう共左様であらう共  
 戻りおつたら吟味して、親父殿への  
 面當、ぐつこいおめてよい樂しみ、  
 イヤコレ義兵衛、今一つよい事はノ  
 ウ、昨日登つた濱松の五十兩も、金  
 戸棚の合鍵して、コレ見やちよるり  
 盗んで置いたは、金の入るわが身に  
 やりたさ、爲替の金をくすれたから  
 は、これも兄めに塗付ける。出来た  
 母者人、コレ此五十兩ばの、コ

レかうく、と囁く弟、兄長右衛門  
 は棒鞘の一腰こしにさしつまる、難  
 儀をなんぞ投首し、しほ、歸る我  
 家の内、見るより母はやんぐわん聲  
 五丁か十丁ある屋敷に、半日の上か  
 いて、内の事は何になる、朝から  
 げい子やお山狂ひも、あんまりてう  
 でござらうと、わめくは隠居の耳へ  
 つ、抜け、又鬼婆がしやら聲は、長  
 右衛門が戻つたかさ、お絹をつれて  
 親繁齊、詞さつきにも云ふて聞かす  
 に、長右衛門さへ見りやかみ付く様  
 に、近所の手前もち思われ、長右  
 衛門もひたるかる、ソレお絹早う飯  
 をおましや。イヤ飯所ぢやないぞ、  
 問はにやならぬ事がある。コリヤ長  
 右衛門、一昨日取りにいつた爲替の  
 百兩、ドレ金見やう爰へ出せさ、云



のか、乞食の子やら、盗人の子やら  
 知らぬ捨子のおれさば違ふ、素性  
 正しいこちら親子に、利を著せやう  
 さする横道者めが、サア、五十兩  
 の行先を云へ、云はぬか、云はぬこ  
 かうちやま棕櫚箒、振上てりうく  
 肩腰分けず打ちすえる。こり  
 やあんまりさかけ寄る、お絹箒をし  
 つかさ動かせず、詞エ、エ、お  
 前はなア。何さした。何さしたさは  
 エ、胴窓ちやわいな、いかに胤  
 腹分けぬさて、さう酷たらしうはせ  
 ぬものじやわいな、云はぬが禮儀孝  
 行なれど、お前方の氏索性も、あん  
 まりあやば脱けぬぞへ。サア云ひま  
 せうか、云はうかま、腹立つまの  
 捨詞、眞面目になつた母息子、長右  
 衛門は女房を引退け、詞コリヤ母に向

ふて慮外な悪口。それでもお前、云  
 ひ止まぬか。サア、何に云は  
 しやす、禮儀も人によるわいな、な  
 んば結構にあしらうても、かみ合  
 のあるか、様ちやない。エ、私や腹  
 が立つく、身ふるはした  
 る無念泣き、心根不愍と引寄せて、  
 道理ちや、親と云ふ字で何事も、虫  
 やい、親と云ふ字で何事も、虫  
 を死なす胸の中、思ひやつてくれ女  
 房さ、拳を握り男泣き、詞オ、それ  
 く、親ちやぞ、親に向ふて何  
 の不足、コリヤ義兵衛、ちつこか  
 つて箒の役、叩きのめして金の行衛  
 を、オ、合點と棕櫚箒、振上る手  
 を、つと捻上げ、詞ヤ我にはよう叩かれ  
 まい、美事兄をわりや打つか。イ、  
 ヤ弟が打つのちやないぞ、おれが

名代にごつかして、金の白状さ  
 するのぢや。いや白状も絲瓜もいら  
 ぬぞ、兄に指でもさしたらば、此繁  
 齊がうぬをばいまくるぞ。コレ親父  
 殿、金を盗んだ長右衛門、何んでこ  
 なた鼻負する。ソレそれが大たわけ  
 の親玉さやちやわいな、長右衛門は  
 此の家の主人、百五十兩が千兩でも  
 我物を我が使ふが、又撒きちらさう  
 が心次第、それを盗んだと詮議立て  
 阿呆臭いわい、づけ、物を吐かし  
 たら、昔の飯焚きお竹にをひさげ、  
 長右衛門女房が草履直さし、親子共  
 にぶちのめさせて責つかはすぞ、  
 道を立てたる父親の、情に女房は有  
 難涙、親子はふくれる焼餅顔、詞ア  
 義兵衛草臥たノリ、臺所で一ばい  
 せうかい。オ、それがよござんしよ

コリヤ長吉め、失せい、おのれにや  
 大分臺詞があるぞ、弱身を見せぬ親  
 こ子も、後に引添ひ出来合の、つば  
 をかぶつた色事師、打連れ勝手へ入  
 る跡は、早くれか、れば下男、燈す  
 八方行燈の灯、佛壇の御灯は年寄役  
 が繁齊が、こて、燈せごしめり居  
 る女夫の者を膝近く、詞一年々々尻  
 が温もり、道も義理もしらぬば、め  
 追ひまくるも合點なれど、七十に近  
 い繁齊、女房の離別が見目でもない  
 こ、モ堪忍の胸をさすつて居る、し  
 たが否と云はうが應と云はうが、近  
 い内隠居へ呼び取り、母屋の事は構  
 はすまい。女夫乍らそれを楽しみに  
 煩らばぬ様にしてたも、又長右衛門  
 も何やかや、氣の揉める事もあらう  
 が、浮世に長うも居ぬおれに、逆様

事など見せてたもんな、物の誓へは  
 あれアノ御燈、僅か燈心一筋でも、  
 油さの持合で燈つてある、油は繁齊  
 燈心は長右衛門、暗い云つてはか  
 き立て、すり込むと云ふてはかき立  
 て、段々さかき立て、もきあ  
 せて燈心が無うなれば、油はあつ  
 ても家は暗闇、ア其氣の細い燈心一  
 本、コレ高町町人の身の上で、これ  
 が恥の立つたたぬさは畢竟心が狭  
 いと云ふもの、ちつと堪へて氣をか  
 き立てさへせば、いつ迄も身は有  
 明行燈、遠州の御用も相變らず聞く  
 様に、親に安堵を頼むぞや、く、  
 める様に箸折り鏡、心は親身かむ  
 腰、伸して佛間に入りけり。親の慈  
 悲心身にこたへ、羞俯向いたる夫の  
 傍、云はんとすれど胸ふさがり、し

ばし、詞も出でざりしが、コレ長右  
 衛門様、道理は道理なれど、お前は  
 きつうすまぬ顔ちやが、必ずひよん  
 思案やなど、怪我にも出して下さん  
 すなエ、姑御や小舅につらい氣兼  
 も辛抱も、お前と云ふ人あればこそ  
 十年連添ふ女房の手前、立たぬ事も  
 何にもいらぬ、おやま狂ひも藝者遊  
 びも、そりや殿達の器量と云ふもの  
 お半女郎と二人が仲、ひよつと私か  
 知つたか、言譯にさしやんす媒妁  
 詞、愚純な者でも女房ちやと思ふての  
 心づかひさ、私や心で拜んでばかり  
 居りました、其の返報ではなれど  
 も、縁組を變改ば、年ばも行かぬあ  
 の子でも、もしやお前の楽しみにな  
 りもせうかさ心の奉公、詞は疾う  
 から知つては居れど、悋氣所か顔へ

も出さぬは、氣の毒がらす、笑止なご、結構な舅御さ、意地曲悪い、姑御の耳へ入るかさそれ悲しき、私も女のばしぢやもの、大事の男を人の花、腹も立つし、憎氣の仕様も、満更知らぬでなければ、可愛い殿御に氣をもまし煩ひでも出やうかと、案じ過して何んにも云はず、六角堂へお百度も、ごぞ夫にあかれぬ様お半女郎さ二人の名さか、立たぬやうにご願立も、はかない女の心根を不慮と思ふていつまでも、見捨す添ふて下さんせよ、夫の膝に打ち伏して、くごき立てるぞいぢらしき。長右衛門も目をすり赤め、詞女房共忝ない、云やる事ご道理だらけ、道理のないおれが身一つ、さりながら百兩の金を色遣ひご云ふたは嘘。そな

たの弟、才次郎が、死ぬるを助けた雪野が身の代。エ、それはまあ。サ、サア堅う此事云ふまいと思ふたれど、浮氣らしい色狂ひと思はれまゝの言譯、わが身の弟の事なれば、惜しくは思はぬ爲替の百兩、又五十兩の盗人はしつかりご知つてあれど、サア詮議をすれば不幸になる此二た口の譯は立てど、面目ないはお半が事、遠州よりの戻りごけ、お半は長吉乳母諸共、伊勢参りの下向道、石部の宿屋で泊り合せ、私に口の座敷に寝て居る、お半が来て起したも、夢現に聞いて居れば、長吉が参りごけより無体の懸路、明日はいぬれば今夜は、に泣沈む、私ご知つては長吉が毒に思ふであるし、殊に又子飼の奉公人、内へいん

でも必らず母御へ告げてやりやんなサア夜明も近し、乳母が傍へこ、エ、モウらちも無い事、我身ながらも愛想ごつき、連添ふそなたに顔上げて云ふも云はれぬ身のあやまり、美しく云ふてたも程、おりやモ面がかぶりたい、堪忍してたも、こらえてたも、併しこれもさつぱり埒明けてしまつたれば、ごへなりとも嫁入するであらうぞいの、親父様の有難い意見ご云ひ、ハテ過つて憚からぬおれが身の上、何にも案じる事はない、兎角これまでの事は、コレあやまつたく。エ、わづつけもない、女房に何の詫、もう、此事はさらりと流して又云ひ出さぬかための、盃、わしや肴、拵へよう、一つ上つてちご休み詞そんならさ

うせう、ア、氣くたびれか、ふらくれむたい、其間も一睡、ヤツころりごこける、夫にあておふ枕蒲團打着せ女房は、勝手へごつかは行くかげを蒲團の中より手を合せ、詞不所存な長右衛門を、男と思ふて辛抱する心いさの嬉しさ過分さ、千萬年も連添ふて禮ご云ひたい、たんのうさせたい、取分けて五つからお世話なされ親父様、末期の水も上ませず、逆様事の歎きをかけるは不孝ご云はうか道知らず、さつきの御意見お絹が心底、聞けば骨身をさかる、苦しみ、親父様の御了簡お絹の心はさばけても、さばけぬものはお半が事、死なしやつた治兵衛殿、石殿へ恩を仇、其上屋敷へ持つていた正宗の差添は

マアいつすりかへられたも知らぬ賢物、鼻負強いお留守居も、お國へまりなす詞ごない、今夜四つ迄に詮議仕出せよ、モ御了簡は付いたれど、ごごを詮議も雲を闇、所詮生きては言譯立たず、モ死なうご覺悟極めたれ共、詞親父様やお絹が顔、名残に一目ご見に戻り、いよく女房に苦に苦をかけ、不幸に不幸の覆輪かける、此身は何たる大悪人、モ、愛想もこそもつき果てた、我身の上ご忍び泣き、枕も涙ふ涙なり。同じ思ひを信濃屋のお半は胸の憂さ辛さよそ目を包む振袖の内を覗いてよい首尾さ、そつご遣入て枕元、詞長右衛門様長右衛門様今朝下さんした文の返事、ちつご逢ひにさんじたま

ゆすり起せばばげ顔詞アウカーお半が、返事に来たごは合點ごいたか成程お前のお仰有る通り得心して、これ切にさんご思ひ切りませう。オ、出かしやつた、それで互の身の納り、世間の噂もひざりやむ、サア、其心ならこうして居るご又浮名、ちやつご内へ去んてたも、ヤアイ、私やモこれを限りに、さつぱり内へ歸ります、お前は随分お達者で、詞見納めに今一度顔を、よう見せて下さんせよ抱起して顔つく、見る目もあかれぬ雨やごめ、長右衛門も此世の別れご、口へ出されご心の内、詞コレ何もきなく思はずごのう、コレ煩はぬ様にく、母御へ孝行。アイ、今迄はよう可

愛がつてくださった、禮は云はずに氣を揉まして。ア、やくたいたいもな  
い子ぢや、死別れ、サア死別れでは  
なし縁は切つても朝夕見る顔。ア、  
コレ〜コレ去にやいのと突きやら  
〜、名残も惜しの離れ得ぬ、姿をわ  
けて出て行く、果は桂の川水に、浮  
名を流すそばかなけれ。虫が知らず  
か長右衛門、詞ア、どうやらおかし  
い今の去にやう、合點がゆかねも明  
の口、落ちた一通灯かげにすかし、  
詞書置の事、扱こそかけ出して  
宵間に、かげさへ見えぬ四つ辻を、  
又かけ戻つて見る書置、佛壇の間に  
繁齋が、看經の聲いつもよりも、無

常を誘ふ鐘の音、南無阿彌陀佛〜  
南無阿彌陀佛なむあみ。エ、讀み詞  
おまへこそ縁切り外々へ嫁入りする心  
もなく、殊にならぬ此身、世間へ  
知れては私恥は厭はれども、お前  
の名を出すが悲しく、お絹様への詫  
言や、か、様に叱られぬ中、桂川へ  
身を投げ候。エ、お前は御無事で御  
夫婦仲好う折々にば一遍の御回向願  
ひり、エ、ア、〜可愛や、突  
詰めた娘氣で若の花をちらさすも、  
皆此長右衛門がなした業ぢやわいの  
南無あみだ〜讀み詞 嗚ぞやか、様  
の歎き力落さ存じ候間、江戸の兄  
様を呼び戻し朝夕の御介抱頼み上げ  
り。コレ〜そなたが死んで

は猶もつて生きて居られぬ長右衛門、  
一所に死ぬが親御へ言譯、ア、如何  
様因果は車の輪、十五年以前、宮川  
町の藝子岸野に登り、つまらぬ事  
桂川へ心中に出た所、先へ岸野が身  
を投げたを、見るよりふつと死に運  
れ、人の知らぬを幸ひに、其場を遁  
れ今日迄は生延びし、思へば最期  
の一念にて、岸野はお牛と生れかけ  
り、場所もかけられぬ桂川へ、我を伴  
ふ死出の道連れ、ホウ、これこそ因  
果の罪亡し、さうじや〜と觀念し  
桂川へこかけ出す。道引違へ本間五  
六、門口覗き相圖の手拍子、長吉勝  
手を忍び出て、詞兄者人大事ない爰へ  
と懐より取出す五十兩、義兵衛か

ら請取つた約束の骨折賃、件の脇差  
持つてきてか。オ、さげて来たご金  
に引かへ、ヤナニコリヤ長吉、お  
り何にも譯を知らぬが、此脇差はご  
うした代物、骨折にさへ五十兩、義  
兵衛殿はよう出すの、ハテ其五十兩  
も根は相鍵した盗み物、此脇差は長  
右衛門が遠州の殿様から請取つて來  
た詭物、戀の敵の意趣晴し、石部  
の宿で揃いかへたばおれも細工、何  
んさよいか。よい共〜、それを義  
兵衛はごうするつもり。サアインウ  
長右衛門のうつそりも實共知らず研  
みかけ、今日藏屋敷へ持つていての  
う、えらう目玉を貰ふて戻り、今夜  
四つ辻に正眞を渡されば、ごんなば

くが來うも知れぬ、所て此正眞を、  
義兵衛が外で尋ね出したご、藏屋敷  
へ持つて行くご、長右衛門は吳服所  
をあげられ、大方首も空へ上り物、  
これもよかるが。よい共〜、ヤま  
う揃うた畜生めら、おりや幼少から  
大阪の水濱に奉公、母者人の咄して  
聞けば親父殿はこれの御隠居繁齋様  
のお情けで、聚楽町で八百屋商ひ、  
其縁でおのれまでお世話、七つの年  
に信濃屋へ奉公にやつたも繁齋様、  
時に悪者の義兵衛めが、質侍を頼  
みにきたは、ア、ごうでもこりや兩  
家の難儀の筋も推量して、悪者仲間  
へ這入つたも、此謀みを聞こう爲ち  
やわい。其脇差は矢張質物、正眞は

コリヤおれがさして居る。ハアしま  
ふたご、逃げ行く長吉掴み投げ、勝  
手をかけける母義兵衛、其脇差をこ  
取りつくと、猪口才すなご右左、ご  
つさりこりりご投付ければ、長吉も  
起き立つて三人一所に、掴みつき、  
繁齋お絹も馳出で、様子は聞た三人  
共、く〜れ〜と云ふ聲に、こりや  
叶はぬご三人は、行衛知れず逃げて  
行く。隣のお石がおる〜涙、コレ  
インウコレ〜さつきにからお半が  
居ぬ故、尋れて見れば此書置。エ、  
ご皆々胸騒ぎ、詞長右衛門様も何處  
へちや知らぬ、ヤア〜と俄に  
うるたへ、繁齋は氣をいらち詞をち  
は早う其脇差遠州の藏屋敷へ、後日

の言譯證據の三人、追つかけて引つ  
く、いれ、心得ましたこかけゆく五六  
門へごやく桂の百姓、氷の淵に二  
人の身投げ、引上げ見れば見知つた  
顔、アノ愛な長右衛門とお半様。ヤ  
ア、それは皆敗亡、呆れていつ  
そ涙も出でず、詞コリヤヤイコリヤ  
男共女共も皆おちやく、氷  
の淵が長右衛門へ身を投げたさいの  
コリヤ、コリヤ、この者共も皆來  
い、お半が長右衛門さんで長右  
衛門も、お半様ぢやさいや、ア、コ  
レ、二人乍らうろたえまい  
く、高き氷が淵と桂川も心中  
ぢやこ、何を云ふやら譯もなし、何

分早う最期場へこ、百姓共に勸めら  
れ家内の男女呼びつれ、泣きに行  
くこそはなけれ。

十月の月中座

東合大同大歌舞伎

（床本）道春館の段（中）  
思ひ寝の夢の間の枕に契る明方や琴  
のしらべは初花姫腰元共に歌はせて  
ひく爪音の氣高きよ右大臣道春公の  
夏座敷松吹風も一しほにいさ涼し  
さ増らん折ふし一間騒おしく走り  
出た桂姫のふ采女之助は何國へぞ  
コレのふくご取付て顔つくくご  
ヤアをなたは妹の初花ハア恥かしや  
ご袖覆ひ胸撫おろす斗なり初花姫は  
不審顔申姉上げた、ましいは今のお  
聲こはい夢でもごらふじたかお氣も  
じ悪ふはないかへご介抱すれば面は  
ゆげにそなたの手前も面もないさつ  
きに母様も旅行の戀さいふ題を賜は

りし故すさまじき思ひしに何やかや  
心のもつれ案じ煩ふおしまづきもた  
れか、りしうた、ねに采女之助さ只  
二人宇治の川邊をそ、愛さ賤の言葉  
も打なむめ咎を敷寝のかち枕嬉しい  
夢を見たはいのさ咄し賜へば腰元共  
チ、ごふでそんな事かして此マアお  
汗の出た事はいのさつこの亂れに櫛  
入れていたばり申せば初花姫此頃は  
くよ、さふやらお顔の色も悪い  
其様にきな、ご思召おしつらい  
でも出ふかご案じらる、ご姉思ひ  
手を取かばす姉妹の中ご床しき大  
内舞か、る折から入来たる安倍の泰清  
几帳のこなたに、みて後室様よりお

召によつて只今参上致したり誰ぞお  
取次ご言入る聲に飛立桂姫腰元はし  
た立駈ぎソリヤコソ今の、お出たご  
ざいめき合へば、ウ姉様、自は采女  
之助の見へた事お知らせ申さん、皆、  
ちらへご心きかして立て行まだうら  
若き初花のやめて其身も戀ざかりほ  
のめきざかりの腰元共引連奥へ入後  
に入間待兼桂姫逢なかつたご走り寄  
り廻り賜へば、ふり放しヤレ聲も高い  
お姫様委細は御存じ有通り皇子の方  
より毎度の催促御入内有ば双方無事  
に治る浪風もし御得心なき時は後室  
様の御身の上サ愛をよふ辨へご拙者  
が事は思ひ諦め下されよさいふ顔つ

（床本）道春館の段（中）  
思ひ寝の夢の間の枕に契る明方や琴  
のしらべは初花姫腰元共に歌はせて  
ひく爪音の氣高きよ右大臣道春公の  
夏座敷松吹風も一しほにいさ涼し  
さ増らん折ふし一間騒おしく走り  
出た桂姫のふ采女之助は何國へぞ  
コレのふくご取付て顔つくくご  
ヤアをなたは妹の初花ハア恥かしや  
ご袖覆ひ胸撫おろす斗なり初花姫は  
不審顔申姉上げた、ましいは今のお  
聲こはい夢でもごらふじたかお氣も  
じ悪ふはないかへご介抱すれば面は  
ゆげにそなたの手前も面もないさつ  
きに母様も旅行の戀さいふ題を賜は

りし故すさまじき思ひしに何やかや  
心のもつれ案じ煩ふおしまづきもた  
れか、りしうた、ねに采女之助さ只  
二人宇治の川邊をそ、愛さ賤の言葉  
も打なむめ咎を敷寝のかち枕嬉しい  
夢を見たはいのさ咄し賜へば腰元共  
チ、ごふでそんな事かして此マアお  
汗の出た事はいのさつこの亂れに櫛  
入れていたばり申せば初花姫此頃は  
くよ、さふやらお顔の色も悪い  
其様にきな、ご思召おしつらい  
でも出ふかご案じらる、ご姉思ひ  
手を取かばす姉妹の中ご床しき大  
内舞か、る折から入来たる安倍の泰清  
几帳のこなたに、みて後室様よりお

召によつて只今参上致したり誰ぞお  
取次ご言入る聲に飛立桂姫腰元はし  
た立駈ぎソリヤコソ今の、お出たご  
ざいめき合へば、ウ姉様、自は采女  
之助の見へた事お知らせ申さん、皆、  
ちらへご心きかして立て行まだうら  
若き初花のやめて其身も戀ざかりほ  
のめきざかりの腰元共引連奥へ入後  
に入間待兼桂姫逢なかつたご走り寄  
り廻り賜へば、ふり放しヤレ聲も高い  
お姫様委細は御存じ有通り皇子の方  
より毎度の催促御入内有ば双方無事  
に治る浪風もし御得心なき時は後室  
様の御身の上サ愛をよふ辨へご拙者  
が事は思ひ諦め下されよさいふ顔つ

れんく打守りエ、そりやあんまりじや曲もない今更いふも恥かしなむら北野詣での折からに思ひ初たが身の因果ほんに寤た間の夢にさへこがれこがるも戀しさに逆も叶はざ思ひ切り忘りよま思や思ふ程猶忘れぬ戀の闇夫れに引かへ胸慾なむこいはいのこ一筋に思ひ詰たる娘氣の譯もなまめく恨み泣折ふし次の一間には花もうし嵐もつらし諸共に散ばぞ誘ふさそへばぞちるこ古歌を吟する母の聲はつこ思ひし姫よりも采女の助けは氣をあせり扱は様子を御存じか見付られては互の難儀先に奥へこ押やられ是非なくくも入賜ふ時しも襖押

明て館の後室萩の方しこやかに座し賜へば采女之助兩手を突憚り乍ら御前様御安泰の体を拜し恐悦至極仕るシテ今日お召の様子御用いかわこ鏡へば奥口見廻し萩の方近ふくこ小聲になりそなたも兼て知通り先祖より傳はりし獅子王の劔何者の仕業にや盗み取て行方知す此事禁庭へ聞へなば藤原の家は没收もしもの事が有たなら草葉の夫へ言譯なんこやせん斯やこ自も身につまりし今の難儀便りこいふはそなた衆兄弟力よ成てよき様に思案を頼む泰清こ世にしみんくこ聞ければ采女之助頭を下委細承知仕る我々が爲には御主人

同然の道春公いかで疎略に存すべき天をかけり地をくつて隠る共草を分つて尋出し御手に入んは案の内御氣遣ひ遊ばすなご力を付る折こそ有皇子様より御上使しらせの聲聞て采女はいぶかる面色御臺は眉をしはめ賜ひムン皇子様より御上使こは姫を入内の催促ならん自よきに言らば入まだ咄したい事も有、采女之助はマア奥へこ仰に否む色目なく然らば後刻こ夕間暮禮儀は厚き式臺に心を奥こ次の間へ立別れてぞ、入相時



次玉藻前曦袂  
右大臣道春館の段

道春館の段

中 豊竹駒太夫  
切 鶴澤重造  
野澤吉兵衛

人形

鷺女金藤治 吉田榮三  
采女之助 吉田玉幸  
後室萩の方 吉田小兵吉  
娘初花姫 吉田文五郎  
娘初花姫 吉田扇太郎  
中納言重久 吉田玉市  
腰元 大徳

(床本)この淨瑠璃は寶曆元年正月豊竹座に上演されたもので殺生石の傳説を題材とし鳥羽帝の御兄薄雲王子の反逆と妖狐の化現玉藻前を配合せて趣向を凝らしたる作で五段ものでこの段は三つ目で俗に(玉三)と稱されてゐます。安田蛙桂が立作者で淺田一鳥、浪岡橋平が合作してゐます。この淨瑠璃の内容を申し上げます。右大臣道春の娘、桂姫を薄雲王子が懸想して侍妃に迎へよふこします。桂姫には安部采女之助といふ侍ご想恩の仲にあるので請入れませぬ王子は眷戀の情に馳られて復臣の金

藤治を遣はして、桂姫の應じなければ家寶の名劍獅子王を出せと難題を言かけます。獅子王の名劍は既に何者にか盗まれてゐるので詮方なく桂姫の首を遣る破目になつたが桂姫は後室萩の方、實子ではなく五條坂で拾ふた捨て子であるので心苦めて討つ事も出来ず、妹の初花を身替りに討たうとしたが道に之れも恩愛の絆にひかれて及ぶ鈍るので双六盤を姉妹に侷めて勝負をさせて何れかを討たうこ苦肉の策を思ひつきます。姉妹は互に死を譲りあひましたが遂に桂姫も勝つて、初花姫も討たれるここになり首をさし延べましたが金藤治は意外にも勝つた桂姫の首を討落しましたので萩の方は怒つて鷺塚に詣ります。後室に戀を斬られた金藤

治は初めて本心を明し桂姫の實父であること、名剣を盗んだのも自分であること、苦しい息の下から自白します。勅使が来て、妹の初花姫の歌才が天聽に達し更衣の官に召抱へられるといふ筋合で御座る。この(五三)は士佐大夫が十年振りに十八番の咽喉をきかれます。古雅な郷土香の秀れた逸品で御座る。

道春館の段

M 早夕陽も傾きて、無常を告ぐる鐘の音も、いこい淋しき黄昏や、間毎を照す銀燭の、光燦ゆき廣書院。程も有らせず入来る驚塚金藤治秀國素袍の肩肘いかつ氣に、上座にこそは押直る。斯も知らせに館の後室、衣紋正しく出迎ひ。詞御上使様には

御苦勞千萬、皇子様より御説の趣仰せ聞けられ下さりませと、辭讓の詞に一揖し。詞上意の次第餘の儀にあらす、皇子様豫々御所望有し獅子王の劍、今日中に差上ぐるか、左無くば娘桂姫が首討つて渡さるるか、二つに一つの御返答す、只今仰せ聞けられよ。ハアコハ存じがけ無き御難題、其劍は紛失致し、所々方々尋ねれども、今に於て行き方知れず今暫しの御容赦を。アイヤ夫りや成らぬ、皇子御心を掛られし桂姫、度々催促有ると雖も、兎や角と言延し、打捨て置かるゝ事、貴族の威勢鈍きに似たりと、以ての外憤憤り劍も無くば桂姫、首にして御渡し成されと、退引爲せぬ釘鎧。胸にひつしと萩の方、途方涙に暮れ給ふ。

後に始終桂姫、此方の間には初花が忍んで様子立聞こも知らず御臺は涙を拂ひ。とても手詰めに成る上は執れ逃れぬ娘の命、未練の申事ながら、一通り聞いて給へ。詞過去りに給ふ夫道春、夫婦の中に子無きを憂ひ清水の邊なる、三神の社へ立願込め三七日の參籠、其歸るさに産子の泣聲、肌上添しは雌龍の鱗形、由緒有る人の胤ならん、神の御告を連れ歸り、育て上しは桂姫、間も無く設しアノ初花、右と左に月花と、詠め暮せし姉妹を、是非に一人は無い命殺さじや成ぬ品と成り、せめて夫も在まされば、間談合を有らう物、何と言ふても身を悔みたる御涙、止め兼てぞ見えけるが、思案極めて顔を上げ、杖柱も思ふ姉妹歸り劣りは無

けれど、詞劍で殺さば三神への恐れと言ひ、殊に義理有る姉妹、爰の道理を汲分て、妹の初花を代りに立て給はらば、此上も無き御情ま、云はせも果す聲荒らげ。詞ムスリヤ三神の咎は恐れ、神の御末の皇子の仰せ御用ぬは成れぬか、よし夫は兎も有れ上意を受た某に、身代り杯こそ思ひも寄らず無益の間答聞く耳持ぬ、サア只今と詰寄つていつかな挽ぬ其顔色。叶はぬ所を胸を握え、イヤのう御上使、武士は物哀れを知る言ふ、自ら一つ一つの願ひはコレ此双六盤、二人の命を天道の指圖に任せ、負たる方の首を討たば、せめては夫を定業と、諦めらるゝ事も有る、何卒此儀を御了簡、コレ慈悲じ

や、情じや聞分てと、義理と恩愛二筋に、傳ふ涙は雨や小雨、身に振掛る桂姫、母の情有難さ、御慈悲と云ふも口籠る、振の袂に白雨の、暗間は更に見えざりき。詞エ、様々のよまひごこ、見物爲るもまごろしけれど、ハテ何ぞ爲う是非無い、サきりくごお始め成れ、も勝負も付くも直に寂滅。チ、成程々々、夫も明さば女氣の、歎き心に掻曇り、取亂しては詮も無し、只餘所なむら暇乞ひ、一思ひに云さして。詞泣々取出す、合用意の袴、四隅には冷泉立る櫛の一本も、露を待間や好癖の哀れ果敢なき有様を、几帳の影に采女之助、斯る難儀も我故ぞ、思へど出るにも出られぬ時宜、千々に心を

苦しめる。思ひは同じ母親が、是が冥途の使か、思へどいこい急き上す、胸は子故の五月間、文目も分ぬ曇り聲。詞娘々と呼出す、アイト返事も一様に、斯こそは誰も白小袖、死出の晴着と姉妹が、妾も對の雪柳たごこ、最後の坐にぞ押直る。一目見るより萩の方、扱は様子を聞しか、先を取られて今更らに、兎角答も涙なる母の歎きに掻曇る、心は月の桂姫、漸々に顔を上。詞委細の様子は先刻から、残らず聞いてをりました。婿放れし時鳥、子で子に有らぬ自らを、此年月の御養育、未だ其上に妹まで、自らを助けんこ、様々の心遣ひ、思ひ廻せば廻す程。



空恐ろしい身の冥加、胸に迫つて一言も、御禮は口へは出ぬわいなア、斯様憂目を見せますも、皆自らの徒から、こても叶はぬ戀合故こ、覺悟は決して居りました、露塵御恩を送りも爲す、先立まする不孝の罪、御赦し成れて下されませ。詞産の父上母様は、何處に何して在るやら、命の際に只一目、逢ふて死度い、是げつかりがと言さして、聲曇らせば初花姫、なう曲も無い其お詞、継令何の胤なりとも、妾も爲には大事の姉様御前は殺さぬ自らを、イヤ妾も、死を争ひし姉妹の、心根不慈も母親は、何れを其ご分衆る、胸は泪の三瀬川身も浮くばかり歎きしや、左あらぬ體になう姫。詞御上使への御馳走に

日頃手練の双六を、お目に掛きや、一世一度の晴業なれば二人ともに大事に掛け、何方も負て給んなやこ、割ては云はぬ親心、傍の盤を引寄せて、是が此世の別れかこ、思へば直す手も撓く、斯る例も綾綿、合袋の紐も疾々こ、合賽の河原を此世から、合種も石數も姉妹の、年も重目に持つ涙、互に筒を取交し、指手引手も端手成らず、合切つ切れつ修羅道の、苦しみ受ん悲しやこ、思へば筒も手も戦ひ、亂次もどろの石使ひ姉をかばへば妹を、助けん物ご双方が、重一五六五三三、果し無ければ氣を苛ち。詞エ、ぐづぐづと埒の明ぬ長慈義、早く勝負を付召れ。早くくくく驚塚が、追み立れば姉妹

も、爰ぞ一生懸命こ、心盡しの盤の面、母は胸まで突掛くる、涙吞込みく、背ける顔に露時雨、乞目を振り姉よりも、妹も心の嬉しさ苦しさ。サア、く姉妹が御勝ち成れたこ、首指延て覺悟の體。見るに母親保ち兼ね。わつごばかりに泣沈む。刀すらりご金藤治。詞、勝負は見えた觀念も、閃めく雷光姉妹の、首は前にぞ落にける。ノウ悲しやこ、初花姫、敢なき體に取付て、悲歎の涙果しなく、泣目を拂ひ萩の方、上使の側に詰寄つて。詞ヤ、狼狽たか金藤治、勝負に勝た姉妹、何故切つた何故殺した、夫ご悟つて身代りご、初花が、志し、水の泡ご成つたのも皆其方が、無得心、謀られたか口惜い

こ、身を戦はして戯立ち涙。上見ぬ驚塚せいら笑ひ。詞、ハ、ハ、ハ、しやら臭い、咎め立て、勝負に勝ふも勝まいが、仰せを受た桂姫、首討たも何譲り、皇子のお心背く旁、悪く身動き召るご、何奴此奴の用捨は致さぬ、退込てお居遣れご、權威を甲に傍若無人。振袖引裂首押包み、睨散して立出る。御臺は赫ご急上げ給ひ詞ヤア、過言なり金藤治、女ご思ひ侮つての雜言無禮、右大臣道春も妻其所動くなご福引上げ、長押の長刀追取て、石突丁ご庭の面、八双三段水車。合母様はは何事ご、止め隔つる初花姫、邪麗仕遣んなご突退け勿退け、揃ふ長刀閃ご返し。詞ヤア、猪口才な腕立ご、首を傍に驚塚り、秘

術を盡す上段下段、合運の極か金藤治、肩先四五寸切下られ、思はず跡へたちくく、付入る又胸蹴落され、是はご駈客る御臺の弱腰、ごうご打付け動かせず。采女是にご飛んで出で、抜手も見せず驚塚が、脇腹ぐつご突込む白及、急所の痛手にごつかご座す。起しも立す聲荒らげ。皇子に詔い悪事を勧め、人を損ふ獻卒め、思ひ知れやご刀の柄、扶る腕首確乎ご押ひ。ヤレ待て采女逸まるな。詞、言殘す仔細有り。詞ヤア、此期に及んで何言譯、血迷ふたか金藤治イヤ血迷ひもせず、後れもせぬ、先暫くご押し止め、苦しき息を弗ご次ぎ詞元某、は東國武士、下野の國那須野の何某、故有つて所領に放れ當所に立越し漂ふ中、女房も初産、産下

したは女の子、流浪の身の悲しさを、雌龍の紙形相添て、五條坂の邊に捨て置きしご程無く妻も世を去りて、憂年月を送りし内、思はず皇子の見出しに預り當家に傳る獅子王の劍盜取つて得爲なば、一廉の侍に取立んごの頼み、ハ、ア長まつたご忍び入り、奪取つたはコレ此驚塚。ホ、御驚きは御尤も、怒に目も暮れ悪人の、皇子に従ひ積悪無道、斯程邪見の心にも、忘れ難きは恩愛の、捨し娘は如何にぞご、案じ煩ふ折も折詞、最前御臺の御物語、聞いた時の其嬉しさ、肉身のお子に代、かばひ給はるご慈悲心、有難しさも嬉しさもなんご詞の有るべきぞ、須彌より高き御高恩、萬が一も報ぜずして、知

らぬ事とは云ひながら、お家に仇する人で無し、譬へ鬼畜の身にもせよ、初花姫の御首に何さ及も當られう、御手に掛つて相果つるば、せめて、心の云譯ぞと先非を悔る身の懺悔。扱ばこぼかり母娘、采女の助立ち寄つて。詞、ミシテ御劍は御邊が所持爲らるゝか。ア、イヤ、獅子王の御劍内侍所諸さまに皇子の館に隠しあれば、術を以て取返されよ。サア斯く物語れば劍の盜賊、何れも立寄つて、成敗召れよと、透進々々首取上げ、詞、コリヤ娘、コリヤ爺じやわやい、爺じやわやい、何故物言ふては呉ぬぞと、眠れる如き死顔を、打守り、打守り、今端に成つて二親を、焦れ慕ふた心根が、いぢらしいやら不意なやら、其時名乗るは安けれども

恩義の二字に彌まれて、ちつと答ゆる辛抱は、熱鐵を呑む心地ぞや、焼野の雉子夜の鶴、子を憐れまねば無しと聞く、可憐者を胸慾に、首打落して手柄、惨い親じや冥途から、怨み事の可愛やと、我を忘れし男泣心を察し秋の方、文も涙に正體無く合一樹の影の雨宿り、一河の流れを汲む人も、深い縁を聞く物を、藁の上から育て上げ、手しほに掛た親じや者、可愛う無うて何とせう、十七年の春秋が、一期の夢で有つたか返らぬ事を口説合立託ち給へば初花も、俱に涙に咽返り。詞、眞に夕べも今朝までも斯うした理由が有らふとは、神ならぬ身の情無い、何ば捨ても子じや無いが、何故自らを切らな

んだ、今から誰さついまつや、琴の復習や十種香、手向の種も成つたかこ、聲も惜ます叫び泣。采女も遠む愛着の、義理の榊恩愛の、血筋の別れ驚塚を、鬼を欺く兩眼の、迷る涙霏々々、四人が涙一時に、落ちて流る、袖の海、膝は淵爲す如く也。斯る折しも勅使と呼ばる聲諸さま、中納言重之卿、衣冠正しく入給へば。思ひ掛無く人々は、敬ひ請じ奉る重之卿の御聲にて。詞、曾比樂廷にて歌合せの折から、息女初花姫より差上られし詠歌、みさび江に、底の玉藻は亂るも、知らるな人に深き心なぞ有しを、帝歡感斜ならず、御賞美の餘り、女官の列に相加へ、玉

深の辭を吹めて、引進来る可しとの勅諭。ヤアヤア仕丁ども、言付たる品早く持て。アツミ答て白臺に、更衣の装束恭しく、御前に差出せばはつと親子は有難涙、辭するは恐れご母親も、取々合着する五ツ衣、合綴羅綿緋の袴、芙蓉の顔色婀娜女の、四邊燦き其新粧ひ、采女之助は突立上り。詞、我は是より姫の首、皇子の館へ持参して、虚實を以て御劍を、奪返し奉らん、早御去ばと立出る。コレなう暫と母親も、頸に名残の稱名は、直に黄泉の道標、合道の案内に驚塚が刀を抜ばかつくりも脆くも枯る芭蕉葉の、露の玉藻も潤み袖、紋り、合兼たる朝日の袂、雲井の御所や九重の、大内山へ、三重別れ行く。



猪名川内の段

鐵ヶ嶽 猪名川 女房おさば 北野屋 大阪屋 呼遣イ

竹本文字太夫 豊竹つばめ太夫 竹本南部太夫 豊竹辰太夫 竹本長子太夫 竹本陸路太夫 竹本龜久太夫 野澤吉彌 野澤勝平 野澤勝市

切關取千兩幟

猪名川内の段

大阪の商人鶴屋禮三郎、新町大阪屋の遊女錦木に溺れ、悪人團右衛門、九平太、鐵ヶ嶽等の奸計にかゝつて窮地に陥つたのを、禮三の最有力士猪名川夫妻の俠氣によつて錦木の身請けを濟ませます、一方近江の藩士三島彌太夫の女お才は許嫁のある身で禮三と私通した爲めに勘當されたのを干田川に隠まれます。錦木は猪名川の女房おさばに對する義理で再び茶屋奉公をする身となり禮三は鐵ヶ嶽を斬つた、めに前途を悲しむ途に錦木と情死まで企てましたが結局人々の盡力で目出度納まるこいふ筋合で、この猪名川鐵ヶ嶽の條は

明和の初年に南堀江に勸進された江戸の相撲稻川と大阪藏屋敷の抱え力士鐵ヶ嶽との間にあつた事實により取り入れて、脚色されたものでありますこの作は全九段續きでこの段はその二段目になつてゐます。作者は近松半二、竹本三郎兵衛、三好松洛等の合作です。

猪名川内の段

芝居は南、米市は北、相撲と能の常舞臺、堀江と國々へ、鳴り響きたる猪名川が、角力の内は夫婦連、爰に堀江の假住居、店は初日の飾り物、牛紙、毛氈、煙草盆、羽織脇差、取禪、酒は松葉、米俵、餘所の軒端をかり初の賑々しくぞ見えにける。詞扱積んだの、見事じや、何羽織、脇差米もあり、ふらい張込し

人形

女房おさわ 桐竹紋十郎 猪名川 桐竹政龜 鐵ヶ嶽 吉田玉松 大阪屋 吉田市松 北野屋 吉田文之助 呼遣イ 吉田兵次

胡弓

鶴澤小庄 鶴澤友駒 鶴澤勝芳 野澤吉真

やの、イヤ又二三年こちの相撲にめつたに負けた事のない猪名川。シタが今度の相撲には、干田川が病氣ゆえ、はづむまいと思ふたが、思ひの外きついはづみ。ソリヤ其苦いの勸進元の顔はよし、江戸方九州方残らず上り、猪名川さいふ最貧のつよい、力の強い、あんな男を持つ者の顔も見たいと表から、内を覗いて高々、夫の噂、女房おさば、出合頭に聞く嬉しさ、顔に少し紅桔梗、前垂の紐繩腰簾、上げてにつこり。詞北野屋七兵衛でござります。オ、是れは、鳥の内の七兵衛様、よふお出、サア、此處へこ打ち通り。詞扱マアきついはづみやう、干田川か出ぬ故に、どう有らふと思ふたが近年の大入、今日は大方この關取

が、さらしやるで有ると思ふて、見物に來たついでながら、ちよつこ悦びに寄りました、關取はまう往てかへ。イエ、今日には叶はぬ用事につき、つい近所まで参られました、まう戻つてござんせふ。ほんにマア日外はいかいお世話で、練物を緩りと見物致しまして、忝ふござります。何時でも鳥の内の祭は、俄が多うて賑かなこと、わたしらは在所者故、物見高いこもゑては、このに呵られます。イヤモ、こちらの方も門がざわつく許りで、奉公人が動かれば、肝心の商ひが、少ない。ヤ斯ういふ中に遅なつたら遅入れまい、關取へよい様に頼みます。こ座を立上げれば、オ、忙しないマア、御緩りと成れませ。イヤ遅い、こよい場

りませぬと、挨拶をこく／＼歸りける。町中の眞實に眉も猪名川が、鐵ヶ嶽陀多右衛門と、打ちつれ歸へる我家の内。詞オ、こちの人戻らしやんしたか。陀多右衛門様ようお出、初日からまだお目にかかりませぬおきつい大入で、お目出たうござります。アイそりやモウ互ひでござんす。見物の足が早さに、そろ／＼行かふと思かけた道で、猪名川に逢ふたによつて、それでちよつと寄りました。それはマア／＼ようこそお出、シタがまだ漸々今先、權太鼓を打出しました。マア緩りとお茶なりごも、會釋に汲出す花香より、心の花香そあいそ有り詞コリヤ女房ごも、留守の内へ、今日の角力割はこんだかイ。エ／＼まだ何にも持つては。ハテ埒の明かぬ、今まで知れぬは何ぞ紛紜でも有かいの陀多右衛門。サアおれも初日に、鈍な角力を取つたによつて、

何でも今日はと思ふて居るが、誰と合すか相手によつては、魂膽も工夫もして見にやならぬ、いつそ聞にやらふかい。ハテマアようござんす、其内には持つてきませう、幸ひ貰ふた肴も有る、主こそ一所に飯上つて行かしやんせ。ドレ拵へうご木綿襪、かけまく神に有られごも、菩薩廻りの女房は、勝手へ立つて入りにけり。詞猪名川様お宿にござりますか、新町の大阪屋からまゐりました。佐右衛門と申します。錦木大夫が身請の跡金、今日中に遣はされませう、ちここちらに身請の客衆がござります故、其方へ相談いたしますが、お前のお顔を立まして、今日中は待ちます。翌日になつたらこちらの大夫をやりませう程に、その時意地無地のない様に、念を入れい申されましたと、いひ捨て使は立ち歸れば。詞ヤア其身受外へさして、猪名川が立つ物かご、か

け出す。詞コリヤ／＼待て、身請の詞も其密も、此鐵ヶ嶽がよう知つて居るほどに、マア行かすごも、よいわい。ム、すりや其身受の相談を、われがよふ知つて居るか、シテ其身受の客ごいふは。イヤ外でもないおれじや。オ、此鐵ヶ嶽陀多右衛門じや程に、マアさう思ふて貰ふかいと、俄にこつきもふしくれ立、頬髭撫で、のさばり顔。詞、聞えた、コリヤ九平太が腰じやな。もつごもわれがためには、大事にかけにやならぬ人じやも、爰をよふ聞いてたも。あの錦木大夫は、おれが親方禮三殿さば、モキつう深い中じや、其錦木ゆえ勘當迄、請られた事、コリヤモウ云はいてもわがみよう知つて居る事じや。そこらばまあ取つてはつて、五百兩さいふ金迄わたし、跡金の二百兩才覺する其内に、大夫殿を外の手へ渡しては、どうもおれが顔が立

ため。わがみが仲へ這入つたこそ幸、どうぞこつちの身請を、じやみさす様にいひ廻してたもるまいか。ヤコレ鐵ヶ嶽頼む／＼と詞を下げ、事を分けたる一言を、鼻であしらふ悪者作り。詞オ、此身請は、どうせうと斯うせうと、俺がまいじや、汝が頼む様にしてやるさいふたら、勝手は可からうがマア厭じや。わりや惠海庵で、九平太様を、ひごい目に合はしたげな。オ、つよいこつちや／＼。其仕返しを頼まれて居る此鐵ヶ嶽、あんだからくさい事いふない。ム、すりや其時の事ご根葉になつて、それ故身請の邪魔するの。イヤ邪魔するごは、何のこつちや／＼、錦木が身請は金づくじやぞよ、僅か二百兩ばかりの跡金、團子の喉に詰つたやうに、ぎちかば／＼と、吠へ面かばくごは違ふて、七百兩さいふ金をかりりさ出して身請するのじや。なる程もつこ

しすりにぎに席即・店北・  
理料御席即・店南・  
番二六四二町新話電


井町

# 清作

はに秋蘭

## 一南温泉料理

に分氣おな快爽で泉温の特獨  
・・を盡一で室客す竭を美善



橋ッ四

は用御の話電お  
南  
5番・701番・711番  
(最)132番・5291番  
西630番

のまさなみ  
理料泉温一南

松竹キネマの封切場

映畫劇場の最善美をつくしたおなじみの  
新装 朝日座  
ごうさんぼり

も、さかく銘々親方を、大事に思ふから起る事じや。がナント斯してたもらぬか、どうぞ俺を、九平太様へ連れて往て、あなたの胸の晴れるやうに、打たしなりこ又踏しなりことして、身請は此方へさしてたも。モわがみのいやる通り、金づくの事なれば今日中に跡金さへ、出来れば頼む事も何もなければ、サちつ急には出来にくい。尤も在所へいふてやつたら、工面の出来る事も有うが、親共の耳へは入れこむない。それでわがみを頼むのじや。又折角身請仕やつてからが、とても太夫が九平太様の、女房にやならぬ。スリヤコレ畢竟が費えと云ふ物じや。黙りあがれやい。太夫が随ふが随ふまいが、それや構はぬ、九平太様にや金が澤山有る。サ小判が澤山有るによつて其金でわいらが面をはり廻すのじや。サイノ、金で面をはらすとも、此猪名川をどう

なりこ、腹の癒る様にして、どうぞ身請をさしてたも、一生の頼じや、恩にも着よ、コレ手へ下げる鐵ヶ嶽さ、頭を疊に擗りつけて、頼む心ぞ切なけれ。詞ム、そんなら何か、踏られても、擗たれても、わりや言ひ分はないさいふのか。イヤモ聞分けてさへたもれば、たさへ此身はごうなつても。ム、イヤコレヤ相談が面白い、あの九平太様の名代に、マア一寸斯うせうかいと、立蹴に控ご踏飛ばし。詞何じや、何じや、何をびこん、さらすのじや。エ、わりや唯た今、云分無いと云ふたぞよ、但し言ひ分有るのか。イヤサ、何の言の分が有るもので。有るまい、何のあるぞい、惠海庵での意趣返し、わりや九平太様を斯う撃はしたか、ヤ斯う踏んだか、弱みを付込む厄病の、髪も頭も引しやなく、苛責む折から表へ息せき。詞ハイ今日

の相撲割でござります。まう追つ付け土俵入じやほごに、早うお出なされませも、書付抛り込み立ち歸へれば、陀多右衛門押披き。詞何じや、鐵ヶ嶽に猪名川。ム、すりや、今日の角力は。コリヤ見い、俺と汝とが角力じやこやい。ム、時も時、折も折、わがみと俺が立合さは、ハテ氣味合な事じやのこ、云ふも心に一思案。詞コリヤ、汝も池田の猪名川と云はれては、國々へ名の通つた者、又俺も大名のお抱、殊に大阪は初てなれば、此角力失敗るが最後扶持離れじや、すりやコレ二人ながら大事の角力九平太様の名代に惠海庵の仕返ししたれば、此算用は濟んで有る、が又錦木が身請の事は俺次第じや、オ、此鐵ヶ嶽が心次第じや程に、水心有れば魚心有り、頼む事も頼まれる事も、マ今日の角力終ふてから、其上の事にせうわい。汝も随分神佛でも叩き廻

して、俺に勝つ様にせい。したが可哀や、俺と取つては骨身が碎けて、重れて土俵踏む事はならぬぞよ、何うぞ頭取衆を頼んで振り替へて貰ふてなりこ、撲らぬ方が勝ちである。お夫さにも撲つて見やうと思ふなら、サ魚心有れば水心。ナ猪名川、士俵で逢ばうと、強い詞の何處やらに、あぢな鐵棒引き擗る雪踏、ぐわらつかせてぞ。詞コリヤ猪名川、ソレ今いふた魚心あればナ、水心、必ず忘れて呉れなよ、ハ、い、い、出で、行く。跡に猪名川諸手を組み、思案に暮れて居たりしが、詞段々日限の切れた跡金、親方が催促するも、九平太も皆所爲さかく鐵ヶ嶽を抱き込んで、彼方の身請を延ばして貰はふより外はない。と云ふても一筋繩では往かれ奴、抱き込む仕様は、ム、太夫が身請は俺次第、魚心有れば水心有り。オ、こりや今日の角力を、ふつて遣ら

新與帝キネ映畫の封切場

辨 天 座

ごうさんぼり

さなるまいわの。ソレ、彼と俺とが立  
 合ふこそ幸ひ、美しう振つて遣り、彼奴に  
 勝を譲つて置いて、其上で退引させず、頼  
 むが近道上分別、とば云へ名取の鐵ヶ嶽、  
 何う魂膽してなりとも、投げれば成らぬ暗  
 れの角力、云はば一生懸命の、大事の角力  
 を金故に、振つて遣る猪名川が、心の内の  
 切なき、汚なき、摩利支天にも見放され、  
 角力冥加に盡きたかこ、思はず拳を握り詰  
 め、身を顛はして男泣、始終立聞く女房が  
 涙隠して。詞オ、此方の人ごした事が、先  
 行にから飯拵へ待つて居るのに、こゝで  
 喰るか、奥へ据ゑうかこ、何氣無ければ素  
 知らぬ顔。詞イヤモ飯なら喰たう無い、ヤ  
 ホンニ角力から呼びに来た、ドレ往て来う  
 こ立ち上れば。詞コレ待たしやんせ、ソレ  
 髪が強う亂れて有るぞへ、人中へ見苦しい  
 結ふて上げふこ取出す櫛箱。詞イヤ〜結

ふて居たら隙が要る、つひ撫付けて置いて  
 たも。オ、お前もこんな髪して、行かしか  
 んした事が無いが、いつその事、何も彼も  
 云ふて聞かして下さんせぬか。詞ヤ云へこ  
 は何を。サイナ、お前の心のナ、それ纏れ  
 髪、撫で付けて置かうより、詞いつそさつ  
 ぱり云はしやんせぬか云ふ事いな。詞イ  
 ヤ云ふまい〜、なんぼ私に云へこ云やつ  
 ても、高が女子の手業、云ふたら大方後れ  
 が出やう、つい撫で付けて置いてたもこ、  
 傍に直れば女房も、押しては云はぬ纏れ髪  
 鬚のほつれを撫で付ける、櫛の背より夫の  
 胸、寫して見たき鏡立。詞サア可いか見え  
 しゃんせこ、向ふ鏡の蓋取つて、寫せば寫  
 る顔と顔。詞申し猪名川殿、色も蒼ざめ、  
 そしてまあ、目の中も潤んで、何うやら氣  
 色の悪さうなお顔付、まう今日の角力へは  
 斷り云ふて行て下んすな。詞何をあんたら

つくすぞい、いつは兎もあれ今日の角力、  
 鐵ヶ嶽と此猪名川、初日の出め先から、町  
 中も待つて居る暗の出合、何でも鐵ヶ嶽を  
 土俵の砂へ埋まにや置かぬ。イヤそりや嘘  
 じや、今日の角力は鐵ヶ嶽に振つて遣るお  
 前の心。コリヤ聲が高い、スリヤ先刻にか  
 らの様子残らず。アイ一問で聞いて居りま  
 した。僅な金に手詰つて、難儀さしやんす  
 がわしや悲しいわいな悲しいわいな。いつ  
 そ此譯親父様に。詞白痴奴が、夫云ふ程な  
 らば此様に、人に觸かれ、踏ればせぬわい  
 昔氣實の親父様、打明けて物云ふこ。禮三  
 様に異見の何のこやかましい、若いお人の  
 水の出端、若し命生害になつた時は、ナ、  
 コリヤ千日に蒔つた萱じやわい。ア、急な  
 事てさへ無くば、工面の仕様も有らうに、  
 僅二百兩の金故に、大事の角力を振つて遣  
 らる成るまいと思へば、臍甲斐ないやら口

惜いやらで、俺や胸が裂ける様なわい〜  
 オ、道理でござんす、もつこもでござんす  
 わいな。角力取を男に持てば、江戸長崎や  
 國々へ行かしやんすりや、其跡の、留守は  
 なほ更女氣の、獨りくよ〜物案じ、夫に  
 怪我の無いやうにさ、祈る神様、佛様、妙  
 見様へ精進も、戻らしやんして顔見るまで  
 案じて夜を寢ぬ女房の、今この切なる苦し  
 みを、連添ふ私に言はしやんせぬ、お前は  
 それほど難面と、女夫に成つた今までを、  
 數へ立て〜、怒み涙に時移り、早追ひ〜  
 の呼使ひ。詞申し土俵入でござります、早  
 うおいでなされませ、ちやつこ〜に是非  
 もなく、詞女房ども、往てくるぞや。エイ  
 そんなら何うでも行かしやんすか。ホ、鐵  
 ケ嶽を抱込んで、工面通り行きや格別、も  
 しも行かれば絶対絶命。エイ。コリヤこれ  
 が喉乞ひにならうも知れぬ。さらばさばか

十月の映畫戦線に  
 燦と輝く名番組

映畫とレウユウの王座  
 道頓堀  
 松竹座

十月の大衆演劇の  
 第一線に立つ精銳  
 劇國新の座角

座角の劇國新

演開回二夜畫  
 演開半時五午正

り一と聲を、跡に残して出て行く。これ  
なう待つて下さんせ、たつた一言言ひたい  
事、猪名川どのの、見れども跡は雲霞  
詞夫の命にかゝる大事、コリヤ斯うして  
は居られぬと、帯引締めて夫の跡、暮ふて  
こそば、三重行く空に、響く櫓のさうから  
こ、打了ふたる太鼓より、鳴り渡つたる猪  
名川と、鐵ヶ嶽との角力割、表にべつたり  
貼紙も、張裂く木戸口押合ひへし合ひ。は  
や士俵入事終り、角力の數々取り盡し、中  
入前ぞ勇ましき。詞東西、東西、道頓堀宗  
右衛門町、北野屋七兵衛様急用でござりま  
す、こ又も呼び出す角力の名乗入替へく  
際負も、今一番こ夕日に連れて。詞猪名川  
鐵ヶ嶽、道具屋名乗上げられ

四股踏み鳴らす鐵ヶ嶽。此方はなほも惜げ  
鳥の、憎ほく上る士俵の上、すは千番に  
一番の、角力も力も幾萬人、鎮り返へつて  
見物す。詞片や猪名川く、鐵ヶ嶽く。  
やつこ引いたる行司の團扇、直ぐに付入る  
鐵ヶ嶽、すつと兩腕差込ます、元より覺悟  
の猪名川が、既に危うく見えたるごころへ  
詞進上金子二百兩、猪名川様へ眞貢よりこ  
聞くよりぐつこ猪名川が、始の氣色何處へ  
やら、鐵ヶ嶽の諸差を、解して士俵へ顛倒  
返へし、力士の如く突立てば、よいやく  
よいやくと數萬人、一度に立つて手を叩  
き、叫喚を作る開作る、櫓太鼓も打出しの  
表は人の。三重山なせり。次第ぐに散る  
人の、中に紛れて息急きと、駕籠を昇せて

北野屋七兵衛、來懸る向ふに猪名川が、胸  
のもやくやさつぱりと、我家へ歸る戻り足  
詞ヨウ、關取様出來ましたと、跡から跟  
いて來る人に、見付られじと駕籠片寄せ、  
七兵衛が素知らぬ顔。詞ハア關取、扱々今  
日は強お手柄。ホ、七兵衛殿、見てじや  
有つたか。見た段かいの、何うやら取  
口は悪かつたが、顛倒返した其強さ。イヤ  
モ今日の角力は譯も有つて、強う取悪かつ  
たも、味な事が張合ひになつて、味な事こ  
は、二百兩の纏頭かい、コレ其纏頭遣つた  
旦那殿が、幸ひ爰にじや、逢ふて禮を云は  
しやりませと、垂を上げれば、詞ヤアわり  
や女房が。猪名川殿、随分健で居て下さん  
せ。そんなら今の二百兩は。コレ關取、お

内儀の勤奉公、志の二百兩、女房ども、  
何にも云はぬ忝い、サア駕籠の衆、やつ  
てと北野屋が、機轉利かして駕籠の垂、内  
は歎きに暮近く、合入相告ぐる鐘もろとも  
別れくに、行末は。

秋の一日を樂天で

芝居とネキマコドモ館

興行の十月の浪花座

早川雪洲特別出演

井上正夫の久々共演  
水谷八重子

・毎日午後四時開演・

四ツ橋  
りよ

九月の文楽座  
消息 日誌

△九月一日

新秋特別興行の初日を華々しく開場

△九月十二日

文楽座吉例文楽會の總見御座りました

△九月十八日

月例B Kの舞臺中繼放送がありました。

鑑太夫の『壺坂』澤市内の段より谷底までを放送しました。非常に好果を挙げましてフアンの評を戴きました。

主演者の主なる連名は

鑑太夫、新左衛門、寛市、人形は文五郎

のお里、榮三の澤市、紋太郎の觀世音でありました。

△九月十四日

學生映畫聯盟主催で初めて文楽鑑賞會を開かれました。各校幹事の斡旋で同好者多数で意義ある鑑賞會となりました。こは喜ばしいことで幹事諸氏にあつくお禮申上げます。

△九月二十日

C I S 萬國統計會議員の諸氏が大阪府樂田知事の招待で當座を見物されました。

一行内外の名士をすぐつて二百餘名でありました。この日のために特に狂言を選定して特別出演さいふことで左の通り上演しました。

義經千本櫻

道行初音の旅路

靜御前 豊竹つげめ太夫

忠 信 竹本鏡太夫

瓶醜會の方々が三十餘名打連れて御覽覽せられ大層御満足の辭を頂きました。

△同日

新任大阪府警察部長と御同伴で御來座されました。かれて人形には非常に御趣味深い方と承つておました。御來場早速人形を自ら採られ、また『八陣』を大序から切までを御多用の中を聴き了られ御満悦であられました。

△同日

文部省監修官藤岡繼平博士と港区教育會の方々が御同列で御來觀せられました。

博士は歸京の時間を延してまで立寄りられたとして、歴史の教科書御編纂をなされるに就て是非文楽を入れ度いと非常に御熱心で來年の分には實現するご感銘深く話して往かれました。

竹本 源路太夫

豊竹 辰太夫

竹本 長子太夫

野澤 勝市

竹澤 團六

鶴澤 綱右衛門

鶴澤 友衛門

野澤 勝三郎

伊達 娘戀緋鹿子

お七火の見櫓の段

人形役

道行の段

靜御前 吉田文五郎

忠 信 吉田榮三

お七火の見櫓ノ段

娘お七 吉田文五郎

武兵衛 桐竹文五郎

下女お杉 桐竹紋太郎

丁稚彌作 吉田市松

△九月廿一日

新秋特別興行も連日好人氣の裡に打上げました。

阪急 夙川

岡部商會

岡部商會支店

電話新町 二六六九

電話西宮 一九七六

五五

五五

賣收傘 燈提替秋 達用掃刷各 社本行松

前門區振振區南坂大

高辨 屋津亭 參記

番七廿一八南電

化粧タイル

水道衛生工事

洗面、浴場、

水洗便所設計

汚水浄化装置

特許無臭便所

西區立賣堀北通一丁目

新一橋

岡部商會

岡部商會支店

電話新町 二六六九

電話西宮 一九七六



きしはさふに秋蘭なかや艶

# 會宴御の座樂文

- お申込は二十人様以上を受付申上ります。
- 記念撮影のお写真ば終演と同時に所持歸り出来るやういたしてあります。
- お申込はお場席其他の準備の都合上五日前にお願ひいたします。
- お申込は四ツ橋文樂座事務室へお願ひします。
- お電話の御用は前賣専用南四七一・三七八八・七四〇八番へ

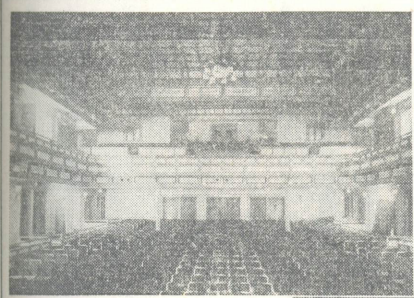
(B) 金四圓 (御一人様)

(A) 金五圓 (御一人様)

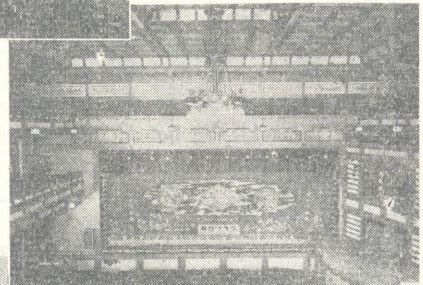
一等椅子席で御觀覽をねがひ  
お食事は快美な『ランチ』  
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ  
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ

一等椅子席で御觀覽をねがひ  
お食事は皆様本位の御定食  
(和食洋食兩様の設備が御座ります)  
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ

グ 文 四  
ラ 樂 ツ  
フ 座 橋



景全席覽觀内場



む望を臺舞りよ席覽觀



景全觀外座樂文



口入脚席賓貴と所樂休面正階二

優良國産品

# ムーリク美身ブラク

アレを止め白  
粉のツヤを良  
くするクラブ  
美身クリーム

# バンビブラク

新清化粧美  
の便利白粉

名作の十一月興行  
文楽座  
人形浄瑠璃

